

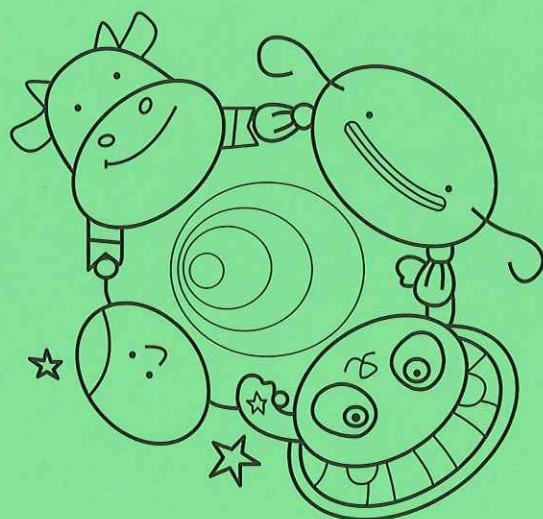
全国児童館児童クラブ びわ湖大会

第10回

「でっかいびわ湖に集え！子どもも大人も輝こう！」

～つなげよう！人・心・未来～

平成22年度児童福祉週間標語最優秀賞
「地球はね 笑顔がつまった 星なんだ」
宇野絢子さん（滋賀県）



報告書

平成22年

11月20日（土）～21日（日）



大会を終えて・・・滋賀のスタッフ全員で

も く じ

○もくじ	1
○大会日程	2
○はじめに	3
○全体会	4
○分科会	16
○あそびにコンビニ	32
○交流会	34
○閉会式	35
○びわ湖大会発議文	36
○大会を終えて～メッセージ～	37
○大会を振り返って	45
○アンケート結果	46
○新聞掲載記事	48
○編集後記	49

大会参加者数（主催者発表）

		1日目	2日目
全体会		1,046人	—
あそびにコンビニ		延べ1,674人	—
交流会		377人	—
分科会	第1分科会	58人	55人
	第2分科会	46人	39人
	第3分科会	79人	71人
	第4分科会	39人	25人
	第5分科会	31人	29人
	第6分科会	56人	51人
	第7分科会	44人	37人
	第8分科会	30人	26人

「豊かさの裏にある『心の貧困』を考える」

～子どものホンマの笑顔に出会うために～

物があふれ物質的には豊かになり、子ども達を取り巻く環境は日々便利になってきています。しかし、その一方で心が取り残され、自分さえよければいいという子どもや自分自身さえも大切に思えない子どもが増えてきているように感じます。このような子どもの『心の貧困』は、本人や個々の家庭に任されることではなく、社会全体で取り組んでいくべき問題です。私達大人には子ども達の『豊かな心』を守り育てていく責任があります。

このびわ湖大会では、子どもの健全育成に携わる全国の仲間が『心の貧困』に正面から向き合い、自らの役割やそれぞれの施設の役割について意見を交わし、その中で心を育てる遊びの重要性を再認識すると共に、子ども達にできること、しなくてはならないことを学び合います。

今の子ども達が抱えている問題は何でしょうか。子ども達を取り巻く環境はどのようなのでしょうか。私達大人が、子ども達に本当にしなくてはならないことは何なのでしょう・・・。

1年前、びわ湖大会に向けてスタートを切るにあたり、それぞれの思いや意見、社会への苛立ちを素直にぶつけ合ったことを昨日のこのように思い出します。そして、その話し合いの中から全国の大勢の仲間と共に、今考えなくてはならないという思いで出てきたキーワードが、開催趣旨に使われた『心の貧困』という言葉でした。

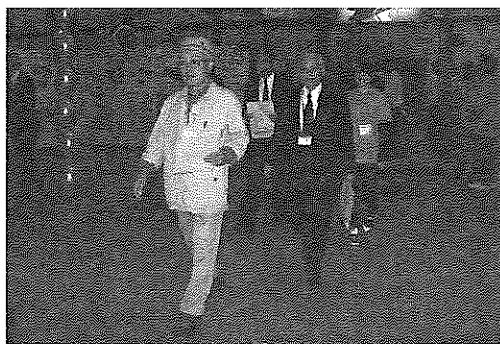
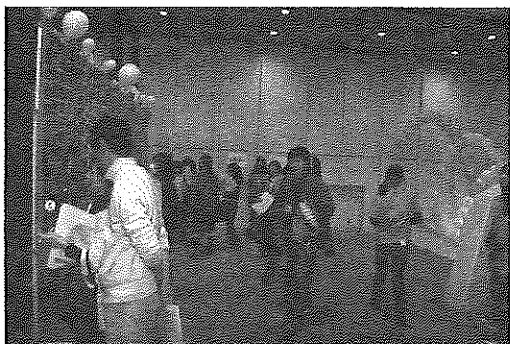
貧困という言葉聞いて良いイメージを思い浮かべる人は、あまりいないと思います。県内のスタッフからも「こんな暗い言葉を使った開催趣旨は、児童館に相応しくない。」という声が少なからずありました。しかし、児童館に相応しくない言葉だからこそ、向かい合わなければならないのではないかと考えました。この言葉を児童館で聞くことがないように、そして、心からの本当の笑顔に出会うために、子ども達の心に寄り添うことができる大人が必要であると考えたのです。その役割を担う大人が私達でありたい。そんな思いを込めてこの言葉を選びました。

子ども達の豊かな心を育て笑顔を引き出す力を身に付けるためには、どのような大会にすればいいのかという協議の中で一人の女性の名が出てきました。ケアリングクラウンの石井裕子先生です。本大会での記念講演を依頼するために先生のお宅へ伺った時、初対面の私達に対して当時抱えていた不安や悩みなど、まるですべてを見透かしたようにお話してくださいました。先生の、一言一言が心に染み込んでいくようでした。全国からびわ湖大会にお越しいただく大勢の方々にも、この石井先生の世界に触れていただきたい。そして、その体験が必ず今後の子どものかかわりの中で、活かしていただけるに違いないと確信しました。

このような過程を経て、迎えることができたびわ湖大会。この大会の企画運営に携わったすべての人が、たくさんの不安や悩み、葛藤を抱えながらこの1年を過ごしてきました。しかし、もう一方では、今まで気付かなかった人の優しさや暖かさを感じ、多くの人に支えられながら過ごした1年間でもありました。この経験を通して、私達自身が石井先生のように心からの笑顔を、子ども達に与えられるような大人になっていければと思います。

最後に、すべての関係者の皆様とご参加いただいた皆様に御礼申し上げます。本当にありがとうございました。【第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会実行委員会】

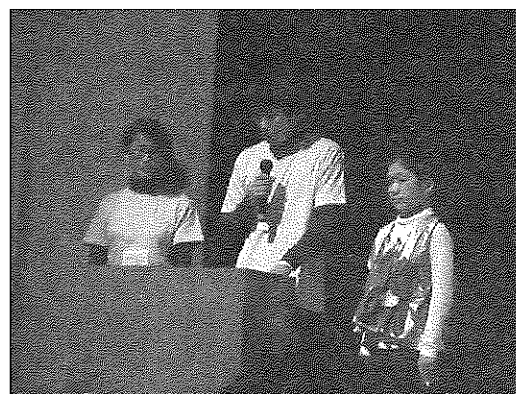
全体会



オープニング「笑顔あつまれ！」

豊かな水をたたえた母なるびわ湖。風船で水をイメージし皆様を湖に誘いました。びわ湖の恵みを受け、愛され育った県内児童館に来館する子ども達が、湖に暮らす魚に扮し、優しく、穏やかな波間に抱かれながら遊ぶ姿を表現しました。

そして、びわ湖の豊かな水のように溢れんばかりの笑顔のメッセージ「地球はね 笑顔がつまった 星なんだ」（平成22年度児童福祉週間標語最優秀作品）を考案された滋賀県在住の宇野絢子さんが心を込めて届けてくれました。



開会式

■開会宣言■

第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会実行委員長 吉村 潤子

全国の皆さん、ようこそ。記念すべき第10回目の全国大会を滋賀県大津市で開催できることを嬉しく思っています。子どもも大人も輝ける2日間になることを願って、只今より第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会の開会を宣言致します。

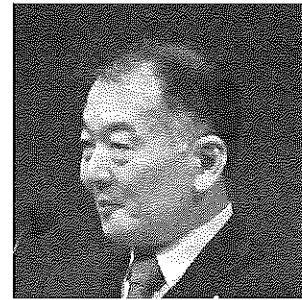
ここにいるみんなで「つなげよう！人・こころ・未来」



■主催者挨拶■ (要旨)

財団法人児童健全育成推進財団理事長 鈴木一光

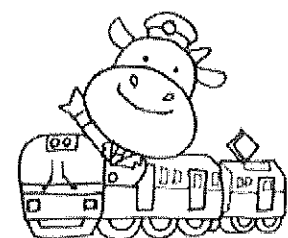
びわ湖に龍が下りて、恩恵を授けてくれる演出でしょうか。風船の橋渡しがあって、すばらしいオープニングでした。年齢の幅が広い子ども達が登場し、小さい子が順々に上の子を模倣して文化を伝承する舞台を見ていました。子ども達一人ひとりが楽しみ、嬉しそうな顔で演じている様子が児童館らしく、改めてこの大会の意味を感じました。



私達は、児童館に興味・関心がない人達に対し、説得する言葉をもたなければなりません。「何のために遊ぶのか」「遊びが人格の何に作用するのか」こういったこと一つひとつを児童館の遊び活動や広報紙の中でわかりやすく説明してこなかった。だから、勉強は役に立つけれど、遊びは日陰に追いやられて子どもが苦しんでいたといえます。遊びを体験した子どもと体験しない子どものどこに差があるのか、児童館関係者は深く考えなければならないと思います。

漢の有名な大將軍“張良”が太公望の兵法の奥義を会得した「黄石公」に兵学を習う逸話があります。先生は何も教えてくれない。ある時、馬に乗る先生が左足の沓(くつ)を脱ぎ落とした。「拾ってくれ。」と言われ、拾って履かせて差し上げる。数日後、先生は両足の沓を脱ぎ捨て、また「拾ってくれ。」と・・・両方の沓を履かせた“張良”はハタと気づき、奥義の伝授を受けました。これは心の構えを伝えています。初回は偶然、沓が脱げたのかもしれないが、2回目は何か伝えたいことがあるに違いない。“張良”はそれに気付いたんです。

今、政府では「子ども・子育て新システム」、「幼保一体化」、「事業仕分け」等々、次々と新手法が打たれています。私達が「この先どうなるのだろう。」と思っている内は、権力者の顔色を窺ってばかりで後手に回ってしまう。しかし、子どものことを考えれば、それを待っている時代ではない。児童館は、子どもとその家族を幸せにするために何をすべきなのか。今までやってきたことを総点検して、これを淡々とやるしかありません。そういう視点から社会に働きかけていく起爆剤になれば・・・と思い、この大会をずっと応援してまいりました。そして、これからもそのつもりです。多くの方々のご努力で成り立つ2日間の大会を楽しみながら学んでいきましょう。

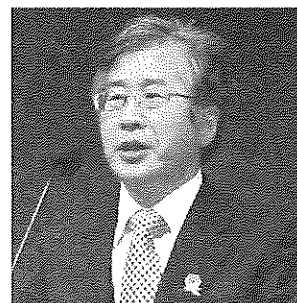


皆さんこんにちは、只今、紹介のありました滋賀県児童館連絡協議会の里田と申します。

全国各地からようこそ滋賀県へ。ようこそびわ湖へ。

記念すべき、この第10回を滋賀県で開催できることを私達は喜ばしく、ありがたく思っております。

びわ湖に伝わる竜神伝説。これをイメージして子ども達が一生懸命演技しましたオープニングは、如何だったでしょうか。



さて、「豊かさの影に隠れる心の貧困～子ども達のホンマの笑顔に出会うために～」これが、この大会に一番期待を寄せているところでございます。

物があふれ、物質的に便利になった今日。その一方で子ども達の心が置き去りにされ、自分だけ良ければそれで良い。また自分さえも大切にできない子ども達が増えています。「心の貧困」といっても過言では無いかと思います。

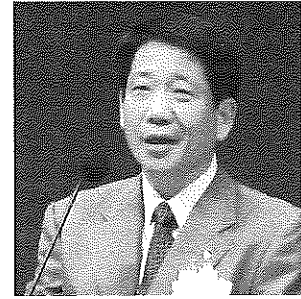
この全国大会が子ども達の抱える心の貧困に正面から向かい合い、すべての大人の人が、またすべての社会を営む人達が、この子ども達に「何がしてあげられるか。何をしてやらなければならないのか。」ということをそれぞれの立場で、また、それぞれの施設の立場で十分に意見を出し合い、交流し合い、そして何かをこの大会で掴んで帰っていただけたら幸せかと思えます。短かな時間ではございますが、皆様の方で子ども達に「明るい笑顔と期待できる未来を」創ってあげていただきたいと思います。どうかよろしくお願ひします。



■開催地挨拶■

滋賀県健康福祉部次長 南 史朗

第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。



全国各地から多くの皆様のご参加をいただき、ここ滋賀県で記念すべき第10回目の全国大会が開催されますことをお祝い申し上げますと共に、140万人の県民を代表して心から歓迎を申し上げます。

近年都市化や核家族化の進行、少子化等により地域社会における人と人のつながりが薄れるなど、子ども達を取り巻く環境は大きく変化しており、次代を担う子どもが健やかに育つ環境づくりが求められています。

国においては、本年1月に今後の子育て支援の方向性についての総合的なビジョンとして「子ども・子育てビジョン」が策定され、子どもと子育てを応援する社会に向けた取り組みが進められています。

本県におかれましても、本年3月に策定した「淡海子ども・若者プラン」の下で、行政、子どもや若者にかかわる団体・機関、そして県民一人ひとりが課題認識を共有し、将来のありべき姿をしっかりと見据えた上で、子ども・若者育成支援施策を総合的に推進していくこととしております。

特に、社会全体で「子育て・子育て」を支え、子どもが生まれる前から自立するまでの切れ目のない施策を進めているところです。

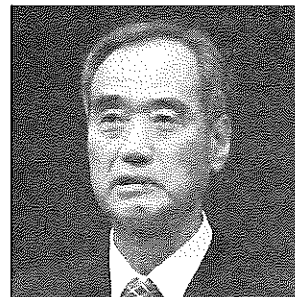
こうした中、全国の児童健全育成に携わる児童福祉関係者様が一同に会し、資質の向上や交流を目的として研究・協議をされることは大変意義深いことと存じます。「地球はね笑顔がつまった星なんだ」冒頭にご紹介のありました宇野絢子さんの標語のように、2日間にわたる大会を通じ、皆様にたくさんの「笑顔」が生まれますことを期待しております。

また、県外からお越しの皆様におかれましては、限られた時間ではございますが、びわ湖をはじめとする、本県特有の豊かな自然環境や文化に触れていただき、県民との交流を深めていただければ幸いです。

結びに、今大会の成功とご参会の皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。

第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会の開催にあたり、一言、挨拶を申し上げます。

皆様ようこそ、大津市にお越し下さいました。地元開催市を代表いたしまして、皆様方を心より歓迎申し上げます。



皆様方には、平素、児童館・児童クラブの発展のため、全国各地でご活躍頂いておりますことに対し、先ずもって深く敬意を表する次第でございます。

次代を担う子ども達を心身ともに明るく健やかに、心豊かに育てることは、私達大人の責務であります。

しかしながら、昨今、子育て不安などから幼い子ども達に対する暴力や虐待の事例が毎日のように報道されておりますことは、誠に憂慮に堪えません。また、親だけでなく悩みを抱え込んだまま、どうすれば良いのか分からない子ども達も、まだまだ多い状況にあります。

ご承知の通り、教育基本法には「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚すると共に、相互の連携及び協力に努めるものとする。」と規定されております。

児童館・児童クラブは、地域と連携する中で、遊びやささまざまな活動を通して子ども達の健全育成を図ることを目指しており、従来にも増してその果たすべき役割に大きな期待が寄せられているところでございます。

こうした中、第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会を大津市を会場として開催できましたことは誠に意義深く大変光栄に存じます。

「でっかいびわ湖に集え！子どもも大人も輝こう！～つなげよう！人・心・未来～」のテーマのもと、全国各地の皆様がこの2日間、さまざまな角度から研鑽をされ、また、交流を深められることによって、必ずや大きな成果が得られるものと確信しております。

また、児童館・児童クラブを広く全国にアピールできる絶好の機会になるものと期待しております。

さて、ここ大津市は南北に45kmという非常に細長い地形をしており、日本一の湖びわ湖と緑の山々に囲まれた大変風光明媚なところであります。

また、世界文化遺産であります比叡山延暦寺をはじめ、紫式部が源氏物語の構想を練ったと言われております石山寺、そして、俳聖松尾芭蕉が眠る義仲寺など、多くの名所旧跡もございます。

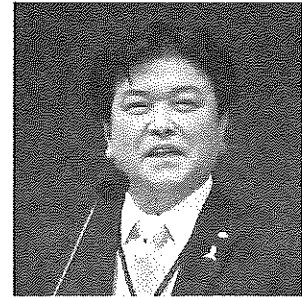
どうか皆様、お時間の許す限り、秋の大津を存分に楽しんでいただきたいと思います。

終わりにになりましたが、皆様方の益々のご活躍と第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会の成功を皆様と共に祈りいたしまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。

■来賓祝辞■

厚生労働省雇用均等・児童家庭局育成環境課 児童健全育成専門官 柳澤邦夫様

本日、真野寛育成環境課長が出席し、ご挨拶を申し上げる予定で昨日より調整しておりましたが、残念ながら本日都合がつかず私が課長挨拶を代読させていただきます。



本日は、児童館や児童クラブに携わる職員の皆様、ボランティアの皆様、またいろいろとサポートをしていただいております各団体の皆様、そして行政の皆様、全国よりこのように多くの方々にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

第10回の全国児童館・児童クラブ滋賀大会がこのように盛大に開催されますことに心よりお祝いを申し上げます。

また皆様におかれましては、日頃より地域における児童の健全育成の推進につきまして、多大なるご理解とご協力を賜り深く感謝申し上げます。

さて、現在子ども達の育ちの現状を見ても、少子化・核家族化・地域の結びつきの希薄化など、地域社会の生活の変化により、多様な体験活動の減少や異年齢集団での遊びの機会など顕著に減少傾向が見られ、子ども本来の育ちであります「遊びを通しての健全育成」というものが、十分に達成できないような状況が見られます。

子ども達の遊びも、だいぶ前から言われていることでございますが、ゲーム等のメディア系の遊びが多くなり、室内でそして個人で時間を過ごせるものが多くなっている現状かと思っております。

今年5月、国立青少年教育振興機構より「子どもの頃の遊びや体験活動等が大人になっての人生に大きく影響を及ぼす。」という大変貴重な研究報告がなされております。その報告書によれば、「子どもの頃に体験活動や遊びの経験が豊富な大人ほど、「やる気や生きがいをもっている人が多いということ。」更に、「どんなこともあきらめずに頑張ればうまくいくと考えている人が多いということ。」が調査結果から明らかになったものであります。

これは、子どもの頃に遊びや生活体験活動等多く経験してきた人達が、現在のような社会環境の中でも、自分の道を切り開き、壁に当たっても乗り越えていけるという社会生活ができていくということだと思います。

また、平成20年に日本学術会議からは「我が国の子どもの成育環境の改善に向けてという研究報告」において、“子どもが群れる場が重要”ということと“多くの人によって子どもが育まれる場が重要”であるとも提言されております。

そうした中、児童館においては、子どもの遊び・発達において専門職である児童厚生員が、子どもと子どもを結び、集団発生を促し、そして自主的な遊びを通して自主性や社会性などを育てていくという誠に望ましい児童の育ちが保障される訳ですから、今後とも子ども達の遊びを通じた健全育成ということに積極的に取り組んでいただき、多くの大人や子どもと接する機会の提供、さまざまな体験活動の提供にご協力くださいますよう、児童館職員の皆様そして行政の皆様をお願い申し上げます。

さて、折角の機会でございますので、現在、子ども・子育てに関する施策がいろいろと策定あるいは検討などと動いておりますので、ここで簡単にご紹介申し上げたいと思います。

今年6月に「子ども・子育て新システムの基本制度案要綱」というものが策定され、現在「子ども・子育て新システム検討会議」が開催されています。ここでは、幼保一体化を中心に放課後児童クラブや子育て支援事業等を、基礎自治体主体で財源や事業等を一元化して行うシステム化が検討されています。その新システムの中で、児童館も子育て支援事業の提供の他に、どのように“すべての子どもとすべての子育て家庭に支援”をしていけるのか、今後検

記念講演（要旨）

『心の扉をノックしてみよう～あなたの笑顔に出会うために～』

ケアリングクラウン「トンちゃん一座」代表 石井裕子 氏

素敵なおオープニング、子ども達、ご覧になりましたか。そして、ここに集ってくださっている皆さんは、何らかの形で子どもとかかわりをもって、仕事にされている方、放課後の子どもに携わっているその方達が、今日は全国からこのびわ湖のある大津、滋賀県に集まっていただきました。

私はこのお話をいただいた時、今、日本の子ども達は遊びが足りない。子育て中のお母さん方も遊びに関して、余裕がないなということをいろいろなところに伺い感じています。



私が今日お話をさせていただくのは、自分自身の心の扉をノックしたり、自分の周りにいる子ども達や友だちの扉をお互いにノックし合う。そうすることによって笑顔が育まれるのではないかなということを、この活動をしている中でたくさん子どもや病気の人に出会って、その人達が命を通してこの私に訴え伝えてくれました。次は、私が相手役になって出会う方にお伝えするのが使命だと思い、これから先もこの活動を続けていこうと思っています。

そして現在、物はとても豊かになりましたが心の貧困が出てきました。心の貧困さは、物の豊さとは逆で子ども達の心がどんどん孤独になっています。私が出会う子どもには大きな力がありますが、それを支える大人に力が足りなくなっていると思います。私達大人が、元氣と自分らしさ自分の心を豊かにする気持ちをプレゼントしていかなければいけないと思います。

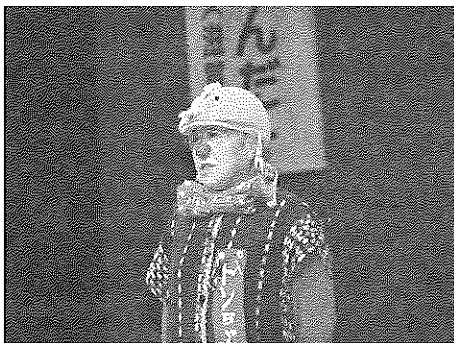
さて、皆さん「ケアリングクラウン」この言葉を御存知の方、ちょっと手を挙げてみてください。たくさんおられますね。私がこのケアリングクラウンというものを知ったのは、12年前です。ピエロというのは、サーカスにいて玉乗りやジャグリングをする人だと思っていました。皆さん目をつぶっていただけますか。（中略） はい、ありがとうございます。

先程は石井裕子でここに登場しましたが、皆さんが目をつぶっておられる間に赤い鼻のピエロになりました。この鼻を付けたことによって皆さんの気持ちに変化はありましたか。目の前にある姿だけで人を判断してしまう、昔の私はそうでした。口ではみんな平等だ。どんな子どももみんな一緒と言いつつ、実は私のどこか奥底では序列化の意識が残っていました。ケアリングクラウンを学ぶようになって、いろいろな人に毎日出会います。特にがんの子どもやホスピスにおられる人達、精神障害や身体障害をもった人達。この出会いを繰り返す内に、私の中でみんな人間は一緒。あなたはあなたらしく。私は私らしく。どんな偉い人でもどんな肩書がある人でも、とても貧しくて今日食べる物も無い、そういう人と出会ってもみんな同じような形でお友だちになることができました。今日はいろいろな人と出会って、その人から学ばせていただいた体験をお伝えして、生きるヒントになるものがあれば自分流に変えて人と接する時に使ってみていただけたら嬉しいなと思います。

ケアリングクラウンはこの服装、この赤い鼻がとても大事です。この文化は日本にはありませんでした。なぜ無かったかと私なりに考えたところ、私が子どもの頃、言うことを聞かなかったり悪いことしたらサーカスに連れて行ってもらうと親に言われていました。ですから、サーカスにいるピエロというものに対して、尊敬の念をもつことは毛頭ありませんでした。幼い頃のイメージのピエロとケアリングクラウンのピエロとはまったく異なるものでした。ケアリングクラウンのピエロは、パフォーマンスという芸と共に心を磨くということが必要だと日々思います。ケアリングクラウンは、人と人が会った時に、信頼できる関係を作ることがとても大事です。その後は人の心や話を聴く。この「聴く」は、耳で聞くのと心で聴く。それがあったら十分だと言います。十分以上のことを十二分と言います。もっともっと聞くことを十四分ですね。十と四と書いて「聴く」です。耳と心で十四分に人の心を聴かなければいけない。そして、その後に共感し合う。また、子どもが逆さまに靴を履いていたら「あら？靴がさよならしてるよ。」とポエム的な感覚も要求されます。これがケアリングクラウン

の基本になります。アメリカやヨーロッパでは、ケアリングクラウンが普通に病院にいて、そしてその効果がとても出ています。私の周りには心を病んでいる人がたくさんいました。石井裕子として相談に乗ると、その人が本当の心の内や家族のこと、子どものこと、夫婦間のことなど、心を開くまでに3回位の時間がかかります。でも、トンちゃんとして出会うと、ほとんどの方が1回で心を開いてくださいます。

日本の医療技術はとても高いが、心のケアをするものがない。オランダ国内の子ども専門の病院には、週2回クリニックラウンが訪問しその治療効果が認められている。それを日本にも取り入れたいとオランダに飛びました。アメリカでは、サーカス用のメイクや服装など基本を学びました。日本に帰ってメイクをすると、みんなから「何？何するの？」と言われながら、子育て講座などの相談業務に当たっていました。でも、オランダにかつら等準備して行きましたが「トンちゃん、何もなくていい。そのままの姿でいいし、その赤い鼻があつたら十分。」と言われました。その時「あっ、これが私に合いそう。よかった。私に合うものに、めぐり会えた。」こうやって活動が続け積み重ね、徐々に、自分に一番合うものだと思えました。そして、オランダから帰ってがんで子どもを亡くした家族の方や医療関係者の方と一緒に、NPOの日本クリニックラウン協会というものを立ち上げました。今では若い人も加わり、定期的に国内15の病院に訪問させていただいています。そこで、いろんなことが繰り返されその中で、病気の子ども達だけを特化してかかわる活動が始まって5年目になりました。今から映像を見ていただき活動を理解していただければありがたいと思います。（映像）



はい、いかがでしたでしょうか。病院でクラウンに出会った方もいらっしゃるかもしれません。遊びは、成長段階においてとても大事なことです。これは健康な子どももそうですが、病気の子ども達が病院の壁に向い、痛いことを我慢し大人の顔色を見て、それに気に入られるような形でしか返せないという状況にあります。この状況の中であるからこそ、子どもが、子どもらしい時間を楽しんで遊ぶことがとても大切です。映像に出てきた子ども達の中にも多くの子が旅立っています。今日会うと次はいつ会えるかわかりません。ですから、その時その時が本当

に真剣であり、その子達の命と向き合っています。でも、命と向き合うから厳しく、この言葉は良い、悪い、傷つくかな、こんなことを考えるのはクラウンの仕事ではありません。クラウンが全部自分を出した時に、病気の子ども達も受け入れてくれます。それが逆に、「お見舞いに来たよ。遊んであげるよ。」と訪問すると気を遣います。「来ていただいて、ありがとう。」とお礼を言います。子どもは本当に賢い。その状況を見て、自分がどうすると親が一番喜ぶかということ、健康な子ども達よりたくさん感じているように思います。人間は本来「食べたい。食べる物がない、ひもじい。」それらが満たされないと次の欲求には進みません。それが満たされてこそ、低次の欲求から高次の欲求が芽生えてきます。その次、初めてどこかに「仲間とグループを作りたいな。」という欲求も芽生えてきます。「友だちと仲よくしたいな。愛されたいな。愛したいな。」の欲求が満たされていくと、人を尊ぶ他人を尊ぶということは、自分が尊ばれることにもつながることに気が付きます。人を尊敬し、そして自分も尊敬されるような欲求につながる。そして、自分よりも社会に世界に対し、それを続けることが自己実現。資格を取るには、勉強して試験を受け、国家試験に受かり資格をもらいました。終わりですけど、この自己実現というのは、何回でも何回でも自分の人生の中でできます。このマズローの欲求階層論はとても参考になり、人間が生きていく上に人から尊重されて自分が社会に役立つ、このことも大切なことだという風に思っています。（中略）

世界中からケアリングクラウンが集まり一緒にカンボジアの施設を訪れます。ある時、一人だけ子どもがいて「遊ぼうか。」「遊ぼう。」と誘い遊び出しました。すると、木の影から、裸・裸足で子どもがたくさん出てきました。びっくりしましたし、押し潰されるかと思いました。皆が「遊ぼう！遊

ぼう！」と言います。この子達は、私達を影から安全かどうか見ていたわけです。そして「面白そう、安全。」と思ったから、一度に飛び出てきたわけです。遊ぶのにルールも何もありません。追いかけてこや、タッチだけの遊びを楽しんだだけでした。が、この子達、今夜寝るところもないのです。

また、カンボジアにはエイズの子どもがたくさんいます。日本では親がエイズでも病院で診てもらいながら出産、または帝王切開するとエイズでなく産まれます。でも、カンボジアでは出産をするのに病院で産むということは稀です。ほとんど路上や、小屋の隅っこです。そうすると、エイズの母からはエイズの子どものしか産まれません。そして、母は死んでいきます。子どもは独りぼっち。孤児院などに入所する子どもはとてもハッピーですが、ほとんどの子どもは今日食べる物、寝る所もなく、それこそ生きる力がなければすぐ自分の命が絶たれる、そういう状況下にあります。日本の子ども達にこのことを説明しても、世界各国で起こっていることなどわかりません。現に日本で、今日食べるものがないという子どもはいないと思います。「あんたあれ食べる?」「要る?要らん?」と尋ねられても、首を縦か横に振れば生きていけます。親や周りの大人達が、全部それをしてくれるからです。

子どもが可愛くない親はいません。親はいいと思って子どもにいろいろなことを言いますが、そのことがどんどん子どもの心を閉ざし、閉ざした子どもを見る親も心を閉ざしてしまうわけです。ですから、やはりお母さんの閉ざした心を開いてもらい、お母さんも楽しんでもらいたい。お母さんの心が豊かになれば、その心が子どもに伝わります。

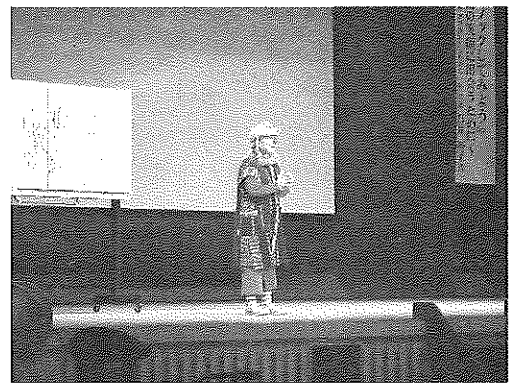
カンボジアの子ども達は、こういう物質的にはとても貧しいけれど、心は本当に豊かです。今、日本に物品がなくなれば豊かになるか。そんな無茶はできませんし、仮にそうになったら生きていけないでしょう。終戦後、個人主義という教育がなされ、いいところもありましたが、ここにきてみると大事な心をもう一度取り戻さなければならぬ時代が来たのかなと思います。

孤児院に入っている子ども達は、とても愛情に欠乏していますのでハグばかりです。ハグで温もりをその子に与えることで、その子が生きる力を自分で付けていきます。親と子が血でつながっていると思っていましたが、実は、親と子どもの血はつながってない。お腹にいる間は、親の養分や栄養をもらって成長しているけれど、産まれたら社会に出たら、私も含め皆さん方が胎盤とならなければなりません。その胎盤から、子ども達は栄養を吸収する。吸収したもので、子ども達は大きく育っていくことを知りました。だから、社会は大事だし子どもにとっては大人はとても大事だということを知りました。(中略)

命を告知されたホスピスにもよく招かれます。ケアリングクラウンをするために風船の技術は必要ではありませんが、人と人をつなぐものとして自分の好きなバルーンで、次々いろいろ創造できる自分を発見しました。今使っている風船は、地球環境に優しい土に帰る風船です。日本製ではありませんが、それは触れると温かいです。「この風船あったかいな。何か人の肌の温もりがする。人と人、子どもや病気の人達をつなぐのにいいな。」と。子育て講座やいろいろなところでそのバルーンを使いながらコミュニケーションをとると、お母さん方もにこにこです。にこにこ自分が楽しい中から学ぶということは、自分のものになります。いくら難しい立派なことを聞いても、自分に興味がない時は自分のものにならないということも、今まで積み重ねてきた経験の中から感じることでした。(中略)

私達は、ケアリングクラウンをしていて物やお金をプレゼントはしません。でも、その子達の生きる力、生きようとするそういう力をプレゼントしなくてははいけないと思います。その子がどんな状況においても生きていく。僕は僕で、私は私でいいのだと気が付くような状況をつくるために。本当に縁のある人だけですが、そこから派生する一つがまたその人から次々と広がる。一人の力から、とても大きなものになっていきます。クリニックラウン・ケアリングクラウンをやっていて、まさかこの文化のない日本にこれだけ認知度ができて必要とされてきたことを思うにつけ「ああ、頑張らないと。」と思います。そして、伝えた人が自分の周りを明るくしていく。その小さなことの始まりから、大きなものへと。皆さんも児童館・児童クラブでいろいろなものに遭遇されると思います。問題のある子どももいるし、問題のある親もいる。大変だけどこの一つに向き合った時、その人がその人の生きる力を付けてくれる。そう信じながら、その子とかかわっていただけたら嬉しいなと思います。

少年院や刑務所も訪問します。警務官が「風船というのは割りたくなり、危害を加える恐れがあるのでやめたほうがいいです。」と言われますが「任せてください。」と言います。「あなた達は、社会で悪いことをしてここに入っていますね。お父さんやお母さんは、あんたみたいな悪い子なんて要らんわ。」友だちも人からも「ああ、友だちにならん方がいい。ああいう人達は避けた方がいい。」と思われています。でも、みんなお母さんから生まれてきたのです。どの子も。その時、お母さんは、「まあ、可愛い。」「よく生まれてくれたね。」と必ず抱っこしてくれました。「あんたらの記憶にはないけど、この風船の温もりがお母ちゃんの肌のぬくもりに似ています。今は、悪いことをして入らなあかんとところに入っています。でも、必ず産んでくれた人がいる。いたのだということを思い出してください。」と。それから、風船を皆に渡すと一人も割りません。皆それほど病んでいるし、自分はもう要らない人間、要らない子とやけくそになっています。でも、そういう機会を彼らに与えることで「ああ、そうか。僕が生まれた時は、お母さんはママはこうやって抱っこしてくれたんだ。」ということのを思い返せる時間になります。そのことで、彼達がよくなるとそんなことはないかもわかりません。でも、児童館に来たら「あの先生が、いてくれるから。」と思いながら児童館に行く。学校から帰る時に、パパやママはお仕事しているから、児童クラブに行っ、そこで時間を過ごしながら帰る。その時に、「あの子はいいな、早く家に帰れて。」と思う子もいるかもしれません。ほんの少しだけ、どんな子どもにもそんな温かみのある言葉を少しかけると、その子がまた思い返す度に「そうや、自分も大事。大切に思われているんだ。」という、その自分が存在しているというそのことを周りの大人が子ども達に伝えなければいけないと思います。



中学校の人権学習や、高校の心の教育などにも行かせてもらいますが、家庭的に問題があったり、授業に出なかったりの生徒の多いクラスが選ばれます。そこでも風船を使います。その前に、ケアリングクラウンの説明をして「私は私でいいし、あんたらはあんたらでいいよ。でも、自分らしく生きなさい。」と言うと、今の若い人は、自由、勝手気ままにしてもいいと誤解されます。ですから、社会にはルールというものがあり、中学生でもあります。自分というものをもった方が生きやすいです。時々、泣く時もあります。「ごめんなさい。今の私には無理です。」ばかり言っていると、仕事とか友だち関係は成り立たないかもわかりません。「今は無理だけど、これはできます。」必ず無理と言った時には、できることを言わなければ私はうまく関係は結べないと思います。その内に、段々自分が何をしたいのか。自分が社会に役立つことって何なのかということが見えてきて、それを一歩ずつ進むことで自分の生き方がとても楽になる。そして自分の心が豊かになり豊かになった心を、また社会に還元できるというのはとても素晴らしいことだと思います。

ケアリングクラウンを知るまでは、「石井さんに頼んどいたら、何でもしてくれる。」いい人になるために努力しました。世間から見られて、人から見られて、立派だ、いい人だとそれだけで生活してきた時期もありました。そうすると、オールオーケーになってしまいます。「はい、はい。」最後には寝込むわけです。寝込んででも周りの人は、「好きであれだけたくさん抱えていたから。」と言う、この程度ですね。その時には、ショックです。「これだけ私は頑張ったのに。何、あのみんなの態度は。」と、それにさいなまされます。でも、このケアリングクラウンを始めて、自分が今できること。この状況でできること。無理だからごめんなさいと言えることが明確になった時、とても楽に生活し楽に生きていけるようになりました。このケアリングクラウンを知って12年ですが、12年間は寝込んでないです。やっぱり自分の健康管理が、精神的にも肉体的にもこれで賄われてきた。今から先も私達の老後のライフワークとして、私が旅立つまで学び続けるのには、一番いいこのケアリングクラウンだなと思います。

今日は、この大会で笑顔というものを取り上げてくださいました。笑顔、とても大切です。外国のドメスティックバイオレンスを受けた方が収容されている施設で気付かされたことがあります。人は、「笑え。」と言われて笑えるものではありません。心も体も傷ついて入所している方の場合には、まずその人の受けた傷を吐き出してから、生きる力を育んでいかなければなりません。ある女性が言葉はわかりませんが、私の手を握り怒りと泣きで訴えられました。「そやなあ、そやなあ。」それだけです。何も言いません。ただ受け入れただけです。その後、彼女は少しだけ微笑みました。そこから彼女は、生きていけると感じました。本当に笑えるということは、まずは辛いものや悲しいものを出しきってしまって、そこからがスタートです。本当の笑いの中から生まれた笑顔と笑顔が飛び交うともっと元気になると思います。

笑顔の「え」はエンジョイする。エンジョイをするということは工夫がなければエンジョイできません。ただ、ただ、音楽が鳴って「あっははー！」でエンジョイというのには、とっても工夫が要ります。今日明日と皆さん、大いにエンジョイしてください。「が」は感謝です。自分が今生きていることに感謝し、そして、いろんな方とつながっている。そのことに感謝しながら、この2日を過ごしていただければありがたいですね。そして、最後の「お」です。「お」は、お互い様。あなたのことばかりするのではなく、私のこともしてもらおう。エネルギーをあげてばかりでなく、みんなのエネルギーもいただくお互い様の関係。「私ばかり頑張っている、あの人は何も動かない。」と、つつい動き過ぎるとそう思ってしまいます。そんな時はちょっと休憩してください。人を見て「何？」と思った時は、多分自分がやり過ぎて疲れている時です。それと、人に何かを言った時に、全然自分の期待しない答えが返ってきて、腹の立つことを言われた時には、きっとその方はめっちゃめっちゃ心を病んでる時です。だからまた、その人の心が豊かな時にその言葉をかけてみてください。やっぱり何回かかけないといけません。丁度その人の心の豊かな時に当たると、とてもいい答えが自分に返ってきます。

そんな風に、自分にとっての切り替え。人ではなく、やはり基本は自分だなということを思います。児童館や児童クラブに訪れる子どもも大人も、いろいろな形で訴えてくると思います。私は病院にいる精神、知的、身体に障害のある子どもから教わりました。ある病院でこんな子どもとの出会いがありました。音楽を流しながら車椅子に乗っている子ども達のところに行ったら、その子が腕に爪を立ててきました。もう看護師さんやドクターは、びっくりしました。私は爪で傷つきましたが、陽気にダンスをしました。痛いけど「ランランラランラン。」そして、ダンスが終わった時に「じゃ、今日は終わり。」と。まだまだ彼は続けたかったらしいですが、この痛さに耐えられる限度だったので終わりました。その翌日、病院から電話がありました。何かあったのかと思ったら「トンちゃん、あの子、長年入院しているけれど、あの後、今まで見たことのないほど穏やかに過ごせたのよ。今まであの子は、コミュニケーションの取り方を知らなくて、あんな風に人を傷つけるようなやり方でしか接することができなかった。でも、トンちゃんのようなかわりもあるんだと皆が気付いて違う方法を考えたら、あの子少しずつ落ち着いてきたのよ。」と、嬉しい知らせでした。

先程の中学校の人権学習で男子学生に友だちになる時、握手する方法を説明し握手をしました。その後「ハグするの。」って。「トンちゃんハグしてるから、あんたもハグしてごらん。」と言ったら、その子は自然とハグにきました。そして泣きました。悪いというか、難しいお子さんだったようです。そのことは、後で中学校の先生から聞きました。「あの子が泣くなんて。」それだけ大きなものを背負っているということです。いろいろなことで変わったことはするけれども、その子その子の今もっている大きな重い悩み、それをどこからトントンノックしてあげるか。そんなことが、これからもっと大切になっていくと思います。

これから分科会に行っても、どうぞこの滋賀県でびわ湖の地で、いろいろなところで宝物を見つけ、宝物を何個持って帰れるか。それを楽しみに、今日明日の2日間お過ごしください。

どうも今日はありがとうございました。

児童館は「児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、または情操を豊かにする施設」（児童福祉法第40条）とされているが、今日多様化する子ども・子育て家庭のニーズに対応して、様々な活動を展開している。現場発“これからの児童館のあり方”を考えましょう。

- 【コーディネーター】 千葉 雅人 氏（東京都中野区キッズプラザ白根館長）
渡部 博昭 氏（財団法人児童健全育成推進財団課長）
- 【講師】 森本 扶 氏（埼玉大学・国土大学非常勤講師）
中川 一良 氏（公益社団法人京都市児童館学童連盟 健全育成・子育て支援統括監）
- 【ゲスト】 柳澤 邦夫 氏（厚生労働省 雇用均等・児童家庭局育成環境課 児童健全育成専門官）
鈴木 一光 氏（財団法人児童健全育成推進財団理事長）

1 目目

○始めにコーディネーターから、どのようなことからガイドライン案と児童福祉法第40条改正案を提案するに至ったかについてお話がありました。

子育て支援や健全育成に対するニーズは高まっているが、児童館の数は微減傾向にあり、その要因として自治体の財政難や児童館の機能・役割が十分に理解されていないということが考えられる。

児童館の特徴である「乳幼児とその親、小学生から高校生まで対象」「地域開放型の施設」「児童厚生員の配置」などを生かしながら、児童館が本来果たすべき役割を機能させるためにも、児童福祉法に機能を適切に表し、理念・役割を確立して示すことが必要である。そのような問題意識などから、ガイドライン案と児童福祉法第40条改正案を提案するに至っている。

第1分科会は、このガイドライン案などを基にして、「児童福祉法とこれからの児童館」について意見交換し、ガイドライン案に現場発の意見を表明する場にしようということで設定した。

○次にガイドラインの研究に携わった森本氏から、ガイドラインの概要をご報告いただきました。

遊びを通して子どもの発達を促進し、個々の家庭や地域全体を視野に入れて、子どもの生活を地域で支え合う仕組み。その拠点として児童館が機能する意義は大きく、ガイドラインによって具体的展望を示すことは児童健全育成施策の活性化を促す上で重要である。

一つ目に児童館の機能と役割についてである。児童館はすべての子どもの日々の生活の一部としてその健全育成を図り、子どもをめぐる環境を調整し、生活の中で生じる問題の発生予防や生じた問題の解決への支援を補うことが期待されており、児童館の機能・役割は、次の5つに整理される。（1）発達の増進、（2）日常生活の支援（遊びを通して日常生活を観察、さらには安定した日常生活を支援）、（3）子育て支援（子育ての共同の場作りという視点で担っていくこと）、（4）問題の発生予防・早期発見と対応、（5）地域における総合的子ども支援と健全育成の地域社会づくり（機能・役割は個別のものではなく、地域における総合的な支援の一環として捉える必要がある。）

二つ目は児童館と放課後児童クラブについてである。児童館職員は地域の状況を把握し、児童館に来る子ども達を「生活のつながり」の中で見る必要がある。その意味から、放課後児童クラブの活動を支えるという機能・役割ももつことは重要であり、それにより、もちつもたれつの相互に良い関係を築くことができる。

三つ目は児童厚生員の職務についてである。子ども達が児童館に来た時の姿と、家庭や地域の課題とを関連付けて考え、家庭や地域などへの目配りから、子ども達を見ていくという循環が大事である。

最後に児童館とボランティアについてである。ボランティアをただ“受け入れる”だけではなく、活動の価値を相互に高め合い、職員が共に成長するという観点が重要である。

○次に、独自に「京都市児童館活動指針」を策定されている京都市の事例とガイドラインへのご意見を、中川氏にご報告いただきました。

京都市は昭和50年代から、児童館と放課後児童クラブを併設する「一元化児童館」を進めている。児童館と放課後児童クラブが一緒になることで、子どもの集団を広い目で見られるようになり、子ども自身は、いろいろな子どもや人との出会いや体験ができています。また、施設が少なくすみ、児童館・児童クラブの職員が相互に補完し合うため、職員が必要な人数のみでできるようになった。

全国に目を向けると、地域でさまざまな課題があり、今の児童館の機能では生活を援助するには難しい部分があるが、基本的に「遊び」の切り口で生活などすべてを見ていくことが大切である。

京都市は、独自に児童館と放課後児童クラブの活動を推進するために、マニュアルでありマニュアルでもある指針を示している。この指針によって、行政に統一理解ができ、現場職員は自分が何をすべきかがわかるようになった。このようなことから一定のガイドラインは必要である。

2 日目

○始めに、ゲストより「子ども・子育て新システム」について情報提供いただきました。

国では、子ども・子育てに関するサービスやお金の提供の仕組みを一つにまとめ、すべての子どもと子育て家庭を支援する仕組みにしようという「子ども・子育て新システム」が検討されている。現場の方々には、このような動向にも注視する必要がある。



○次に、児童館の機能・役割の中から2つを取り上げ、これらについての提案などを、地域の実情やそれぞれの館の実情を交えながら参加者同士で意見交換しました。

- ・子どもの「生活」をどのように捉えるのかは、児童館・職員によってバラつきがあり難しい面もあると思うが、児童館の特徴である“遊び”の中で子ども達の自立性や社会性を育ててゆく（生きる力を育てる）という捉え方が大事。
- ・0～18歳までの連続的な発達過程にかかわることができるのが児童館の強みであり、学校との連携をとっていく必要がある。ただ個人情報や保護者との連絡についての課題も、考えていく必要がある。
- ・地域における総合的な子ども支援と健全育成の地域社会づくりということで、具体的には児童館行事を地域の人達も巻き込んで行うことなどでネットワークを構築していく。また地域の行事に参加することで地域資源の発掘につながり、ボランティアとしてきてもらうこともできる。地域と児童館がお互いの相乗効果を目的として作り上げていくことが必要だと思う。

『最後に』

ガイドラインはあくまでも標準的な児童館のあり方を示すものであり、個々の地域の児童館の細かな実情に対応するためのマニュアルではないこと、児童福祉法やガイドラインによって児童館の位置付けを明確にし、児童館のあり方をしっかりと確立する必要があることを確認しました。

同時に私達は、子ども達の生活や地域に今何が必要かを検証して「遊び」を切り口としながら活動を積み上げ、その実践を世の中に示していくことが大切であることも確認しました。

【第2分科会】「本音で語ろう！“子育て支援”の本質に迫る」

子育て支援

子育ては大変だけど喜びもいっぱい。そんなポジティブな子育て観をひろげていく支援のあり方について、保護者、子育て支援者、学校や地域の関係者など、いろいろな立場の人たちと本音でとことん語り合ひましょう。

【コーディネーター】 大角 玲子 氏 (神戸市立細田児童館館長)

1 日目

『グループ分け』

信楽たぬき、近江牛、彦根城などの「ご当地キューピー」を用いることで、滋賀の名所・名産を知っていただくきっかけとなり、和やかな中で分科会がスタートしました。



『報告』

「滋賀の子育て支援状況 児童館の取り組みについて」 竹内久子 氏 (八幡子どもセンター センター長)
「保護者や関係機関のアンケート結果について」 深谷利子 氏 (膳所児童館児童厚生員)

『グループディスカッション』

ディスカッションの開始にあたり、コーディネーターより、「聴く心を大切に」「発言は短く、全員で」「肯定的に話を聴く」「乗っかりOK、結合OK」のポイントを聞きました。

報告を受けての感想をフリップに記入し、説明を交えて自己紹介を行った後、児童厚生員としての迷いや疑問などについてディスカッションし、いろいろな立場であっても、子育て支援の本質は次のような視点をもつことだと共通理解しました。

- ・いろいろな親子の姿から自分にできる子育て支援・ボランティアなど、自分からできることを見つけよう！地域とのつながりを大切に、地域の児童館としてやっつけていこう！子育て支援は、手を出しすぎない見守りが大切！
- ・保健所や学校などの関係機関との連携が必要である。情報交換し、子どもの良いところ、保護者の様子などを率直に交流し、その子どもの求めているものを探る。
- ・来館者の中でも「声をかけてほしい。」と願っている人もいれば、願っていない人もいるため、内面理解が大切である。
- ・「地域と子ども」「親と親」「子どもと子ども」をつなげる役割が児童館にある。
- ・「聞く」ではなく「聴く」ことが必要。親を認め、聴いて、誉める。時にはアドバイスが必要。
- ・児童館は、利用者が不定期なため、保護者との信頼関係が築きにくい面もある。また、課題解決に向かうことが、困難なこともある。しかし、日々「笑顔」「元気な声かけ」が大切。「保護者と一緒に、子どもの成長を喜び合いたい。」など、職員の願いが届くよう個々に応じた援助を大切にしていきたい。
- ・子どもや保護者との信頼関係を丁寧に築いていこうとすることで、「利用してよかった！また、利用したい。」と思ってもらえるようにしていこう。など

具体的事例を出しながら、さまざまな子育て支援に対する意見交流をしている最中、コーディネーターの「そろそろ5分前ですので、まとめに移ってください。」の言葉に参加者からは、「ええっ？もう！」の声がかれたほど、あっという間の充実した時間となりました。



2 日目

【協力者】

卯野 恭子 氏、川原田智美 氏 (ハッピーマミープロジェクト@滋賀実行委員会)
下池 藍子 氏、長谷川聡子 氏 (ハッピーマミープロジェクト@滋賀実行委員会)
大原 薫男 氏 (天津市生徒指導協同推進教員)、谷口久美子 氏 (NPO 法人 CASN 代表)
高木真由美 氏、河合美紀子 氏 (NPO 法人 CASN 理事)
遠藤 恵子 氏 (NPO 法人 CASN チャイルドラインスタッフ)
廣田 敬史 氏 (自立援助ホームびっつ・ゆにっと 代表)
山田 貴子 氏 (NPO 法人子どもネットワークセンター天気村 代表理事)
辻 充子 氏 (NPO 法人子どもネットワークセンター天気村 事務局長)
西田真佐子 氏 (ほっこりひろば 事務局員)
山口寿津子 氏 (堅田学区社会福祉協議会 事務局長、元児童厚生員)

『グループディスカッション』

子育て支援を“子の育ちを支援する”という視点で捉え、今の子ども達が抱える「心の貧困」とは何か、周囲の大人はどうかかわっていくべきか、さまざまな子育て支援者を交えてディスカッションすることで、“多角的な見方” “新しい気付き”につながるのではないかと考えました。

「心の貧困」からイメージすること

自己肯定感のなさ／人間関係の希薄
愛情不足／遊びの経験が少ない／核家族化
経済的な貧困／忙しくゆとりがない
暴力的な言動／自尊心／仲間がいない
心からの笑顔がない／失敗することが不安
自分がよければいい／友だちがいない
人が傷つくことを平気で言う
自分の気持ちを上手く表現できにくい
ゲーム遊びが中心／遊びに集中できない
すぐにキレル／人を批判する
コミュニケーションが苦手
不信感・不安感など

支援のあり方

- ・子どもと一緒に過ごす中で、「ありがとう」「大好き」「うれしい」等のポジティブメッセージをいっぱいかけていく。
- ・心の栄養となるさまざまな経験、自然体験、集団遊び、異年齢交流等ができるように支援する。
- ・ありのままの姿を受け止め、認め、自己肯定感を高める。
- ・保護者、家庭へさまざまなサービスを提供する。
- ・話を聴いたり、見守ったり、一緒に楽しんだりできる大人の存在。など

『コーディネーターより一言』

参加者・スタッフ・協力者が同じ目の高さで話し合えた分科会でした。最後にテーブル毎に輪を作り、手をつないで「はじめの一步」を踏み出しました。全国各地で、今も歩み続けてくれていると信じています。

『協力者の感想』

児童館の先生方が、こんなに一生懸命子育て支援について考えておられることを知って感動しました。みんなに宣伝します。今後も協力して、子育て支援に取り組みましょう。

『最後に』

「子育て支援」という保護者批判に陥りがちなテーマをととても明るく前向きに考えることができました。児童館だけでなく、さまざまな子育て支援関係者と共にディスカッションすることで、互いにより刺激を受け、これからの子育て支援に必要なことは何か、決意を新たにすることができました。



【第3分科会】「すべての子どもに笑顔あふれる放課後を」

放課後の子ども

放課後は課業から解き放たれた楽しい自由なひととき。でもなぜか「やる気のない子」「元気がない子」「遊べない子」「我慢ができない子」「トラブルを起こしてしまう子」がいませんか。そんな子どもたちに思いを馳せ、豊かな放課後について考えましょう。

【コーディネーター】 梶谷明美 氏（滋賀県野洲市中学生児童保育所ひまわりハウス 所長）

【助言者】 丸岡敦子 氏（京都市嵐山東児童館 館長）

1 日目

『自己紹介』（もち寄った館のおたより、好きな食べ物）

聞く相手が、もち寄った自分の館だよりと好きな食べ物について「あー、なるほど」と納得できる表現でアピールし合うことで、徐々に緊張がほぐれていきました。その後、色別のしおりのくじ引きで進行役が決定しました。

『グループディスカッション』

「豊かな放課後とは？」

付箋を使って「困っていること」「課題」を皆で考え「解決策」を出し合いました。付箋の色を変えることでわかり易くなりました。模造紙に貼り、項目ごとに集める作業をして、共通のキーワードの集まりを作りました。

＝各グループのキーワード＝

1	仲間、トラブル、ギャングエイジ、決まり	7	気になる児童、支援、生活、過ごし方等
2	学校との交流・連携、保護者とのかかわり合い等	8	指導員、子ども、地域、保護者対応
3	子ども達のトラブル、保護者との関係、環境	9	子どもの様子、保護者の意識、子どもの思い
4	遊び、時間、保護者 どうする？等	10	子どもの発達、コミュニケーション能力等
5	最近の子どもって、先生の問題、環境等	11	気になる子ども、子どものおかれている状況
6	宿題について、子どもの様子、経営	12	一般の子ども、子どもの様子、時間、親の問題

- ・ヘルプカードを各テーブルに置き、話が煮詰まった時に、コーディネーター及び講師に的確なフォローと助言をいただきました。
- ・どのグループも、今抱えている悩みや課題など白熱した話し合いが、繰り広げられました。
- ・発表代わりの記念撮影にて終了しました。



2 日目

『アイスブレイキング』

「誕生日のチェーン」身振り手振りアイコンタクトで誕生日の順に一つの輪になりました。参加者全員の顔を見ることができた後、1～12の番号を言ってグループが決定しました。

『1日目のキーワードから、見えてきたテーマを掲示』

- ①気になる子ども ②環境・時間 ③地域、関係団体の連携 ④保護者の意識 ⑤子どもの思い

『グループディスカッション』

- ・5つのテーマの中から各グループで話し合うテーマを決め、討議をしていきました。
- ・ヘルプカードを活用し、タイムリーな助言を受けることができました。
- ・「ワンフレーズ」にまとめていきました。

『ワンフレーズの発表』

①気になる子ども ②環境・時間 ③地域、関係団体の連携 ④保護者の意識 ⑤子どもの思い

テーマ	ワンフレーズ	私たちができること
①	私たちのできるBESTの支援を！	大勢が1つの施設で満足できるようにするのが指導員の役目。Betterな幸せを！
	気になる子ども＝気になる親	保護者と職員との関係が大切
	こころに余裕を	子ども達にゆとりや余裕がないので、職員が余裕をもつ
	聴	聴く耳、子どもの目線の思いに気付くこと
	子どもの中にだけ通用する価値をつくれるような遊び	遊びは子どもと子どもをつなぐ 大人はたくさんの遊びの提供と工夫
	気になる子ども(支援のいる子) 保護者の意識	受容している親と認めたくない親の問題 それぞれの子どもに適した対応の仕方
	子どもに本音を気づかせ出させよう!! 厚生員と遊びたがる子ども	子ども自身が友だちと遊びたい、かまってほしいなど、どうしたら良いのかわかるように援助
②	居ごこちのよい居場所	限られた環境、場所をどう工夫していけば良いのか
	チームで対応	記録→分析→連携 職員のスキルアップが大切
③	地域で子どもを育てる 学校との関係・PR	地域の人に知ってもらう PR活動
④	大人の心を聴くことが 子どもの笑顔につながる	保護者との関係・良い所を伝える お互い飾らない、信頼関係。
⑤	子どもの思い、親知らず！	親・子ども・指導員の思いは違う、個別の対応を



『まとめ』

- ・今の子どもには三間(時間、空間、仲間) + 二間(世間、人間関係)が無くなってきているので、どう補っていけば良いのか。それには子ども、保護者・指導員、地域・学校との連携が大切であり、「大丈夫?」と言ってもらえるような信頼関係を作っていき、子どもを見守る目を広げていく。
- ・聴く耳、伝える声、受け止める心をもとう。今日の気持ちをもって帰り、周りに笑顔と一緒に広げていこう。
- ・子ども達の課題は、大人の課題でもある。

放課後の子どもを見守る大人を「放課後応援隊」と名付け、皆で一致団結し分科会を終了しました。

『最後に』

限られた時間の放課後を、楽しく豊かに過ごすために私達ができることを話し、聞き、考える2日間になりました。

おたよりやディスカッションで「情報交換」できる仲間づくりの輪が広がれば良いと思いました。

【第4分科会】「中高生が求めている支援とは何か？」

中高生支援

小学生もあつという間に中高生。彼らが自分の存在意義を肯定的に感じられるよう、学校や塾以外の地域の居場所として、また親や先生ではない地域の大人として、児童館職員だからできる支援について考えてみましょう。

【コーディネーター】 横田美和 氏（神戸市児童館 館長）

『はじめに』

中高生が求める支援は、どのようなものか中高生や職員の声を聞くところから進めていきました。中高生は地域の中で仲間と、時には一人で自由に過ごせる場を求めています。自己実現も望んでいます。児童館の利用対象は0～18歳までとされていながら、実際にはあまり支援ができていないのが現状です。皆が集える場の実現に向けて、明日から一歩先へ進める支援のあり方（方策）を見出したいと考えました。

1 日 目

『組織的に居場所づくりに取り組んでおられる京都と札幌の先生のお話』

「みんなが集える場にしていくために」

野田 雅子 氏（公益社団法人京都市児童館学童連盟主任厚生員）

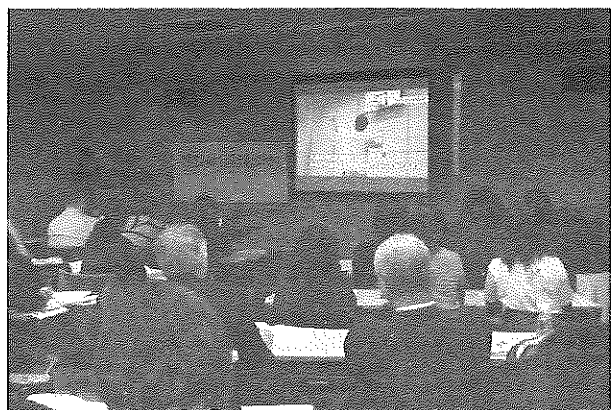
京都市では次世代育成支援を行っていく必要があるとして、中高生の利用時間を18時半まで延長し、居場所提供などの取り組みを実施。中高生にとってはそれでも十分な利用時間とはいえない。また、小型児童館で場所にも限りがある。そのような中でも、利用しやすい雰囲気づくり、児童館行事への参加、OBへの声かけなど、小中高生が継続して利用できるよう工夫などをして、中高生に来てもらう努力をしている。次に、中高生に役割をもってもらえるよう児童館活動の計画の段階から、そのことを組み込んでおくようにして、自主性や社会性を育むようにしている。児童館には地域のさまざまな人が利用する施設特性があるので、そのメリットを活かし、異年齢や地域の方とのふれあい交流も働きかけられる。次世代を担う大人としてどのような力を付けてほしいのかという視点をもって中高生に接することが大切である。

寺田 陽子 氏（財団法人札幌市青少年活動協会こども事業部長）

平成18年から指定管理者制度が導入されると共に、中高生の夜間利用事業「ふりーたいむ」を20館で始めた。毎年実施する館を増やし、今年度は全104館（うち一館は土曜午後）で実施。実施する際に念頭においたのは中高生の居場所として定着させること。夜間利用を拡大するにあたって、反対する声や問題点が出てきたが、地域や保護者・学校へ丁寧に説明をするなどして乗り越えていった。

中高生と職員との信頼関係を大切にしながら、地域の中での異年齢交流の場、自己実現の場にしてきた。学校では居場所がない、1番になれない子どもでも児童館でならリーダーになれる。中高生が「いる」場所から「必要とされる」場所になるようにしている。

今後は、乳幼児とのかかわりや高校中退者・ひきこもりへの就労支援、街づくり・就業体験による自己実現といった活動も行い、中高生が未来への夢を描けるようにしていきたい。



2 日目

『グループディスカッション』

5つのグループに分かれ、それぞれの現状や課題や取り組みについて出しあった上で、現状から一歩先へ進んでいけるよう「明日からできる支援」について考え発表し合いました。

『明日からできる支援』（グループ報告より）

児童館アピール	携帯サイトやQRコードの開設など、時代にあったPR。 中高生も児童館が利用できることをアピールして、まずは中高生に来てもらうことが大切。
発想をかえる	児童館だけではできないことも、地域の方とつながればできるのではないかな。
キャッチアンドリリース	小さい頃から来館している子ども達も成長して、地域社会へと出ていく。 中高生に限らず、皆に対してこのようなつながり方ができるように。
いるだけで楽しい場所から何かやりがいのある場所へ	子ども達自身が日々の活動の中で、何かを選ぶところから始めて、そこから好きなものを見つけて、それが特技となり、児童館イベントや地域へ出ていくことにつなげていく。
成功体験の積み重ね	それぞれの得意なことを見つけて役割を与える。行事にかかわってもらうなど、できることから少しずつ取り組んでいき、中高生に自信を付けたい。また、中高生と共に職員も成長し絆を作っていきたい。
夢の実現へのきっかけづくり	お笑い、ダンスなどの夢をもって活動している子どもと、関連会社の人をつなげていくなど。

※他にも、新たに取り組みたいことや大切さを再認識したことなど、さまざまな意見が出ました。

『寺田先生の助言』

中高生が来ないと悩んでいる館、まだ中高生の夜間開放はできなくても中高生を日常の中で受け入れている館など、多々あると思います。でも、今置かれている状況で「どうやったらできるだろう」「何を工夫すればできるだろう」と考えていくことが大切です。場所がない、お金がないといったあきらめるのではなく、できることから始めていきましょう。

『最後に』

現状・課題はさまざまであっても、児童館の良さは“あったかい人”がいる！ということ。「支援していきたい！」という熱い思いと知恵があれば、“できない”も可能に変えていけます！それぞれの児童館で、中高生への支援を充実させていけるよう「がんばってこう！」と確認し合いました。全国の児童館が、中高生をはじめ地域の人皆が集える場になっていければと思います。



【第5分科会】「地域と一緒にホップ・ステップ・ジャンプ！！」

地域ネットワーク

地域に「出て行く(ホップ)、つながる(ステップ)、創り出す(ジャンプ)」
児童館が地域の拠点となるための自慢の取り組み、目からうろこの新発想！あっ！と驚くネットワークの方法など。目線を変えて、みんなで語りあいましょう。

【助言者】 扇田宗親氏(社会福祉法人 湖青福祉会ケアタウンからさき主任ケアマネジャー)
山口浩次氏(社会福祉法人 大津市社会福祉協議会副参事)

第5分科会のテーマポイントは「異分野現場」の方達とのコラボレーション。
他の施設や現場はどのように地域とつながっているのだろうか？

素朴な疑問から見えてきたのは、児童館だけでは子どもは救えない！ということ。

異分野現場から助言者を迎え、第3の居場所としての児童館が、見方を変えて地域の子どもの味方と頭をつき合わせていく地域ネットワークづくりを、柔軟な企画発想と「ぬくとい」気持ちで2日間討議しました。

(滋賀の言葉であたたかいの意味)

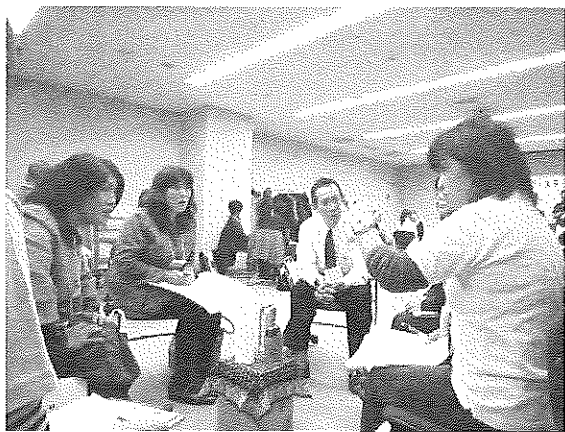
1 日目

『グループディスカッション』

「あなたの心をあたたかくした話～児童館と人・地域のつながりの中で～」

異分野現場からの「人と人とのつながりから解決した事例」の話を聞いて、身近にあった地域や自分の周りの温まる話を思い返し、グループごとにディスカッションしました。思わず、涙が出てくる話や笑顔こぼれる話、現場での熱い話など、ぬくといものが心に残る内容となりました。

話すこと、共有することで「地域とのつながりは、人とのつながり」を再認識しました。



机をとっばらって、ひざと頭をつき合わせて話すことで、初対面の小さなプレッシャーをバリアフリーにして、ぬくとい話で温まりました。

『まとめ』

「フレームを変えると見え方がかわってくる」

こちらから目線の「してあげる」のこだわりを無くして、人とのつながりの中で自在に変えられるフレームをもてば、地域ネットワークは柔軟に広がっていく。



2日目

『グループワーク』

異分野現場と全国からの「ぬくとい」ネットワークで既成概念をとっばらったら、もっと見つかる地域ネットワークの裏技を探るべく企画発想をしていきました。

- ・アイスブレイキング「言っぱなし、聞きっぱなし」

(異分野現場での地域会議などでよく使う。)

- ルール
- ①仕事以外の話をする。
 - ②メモはとらない。
 - ③地域の方を司会にして労をねぎらう。



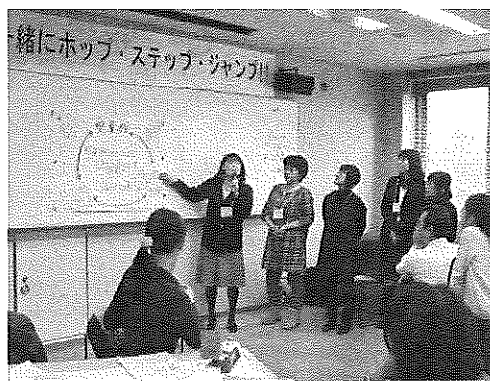
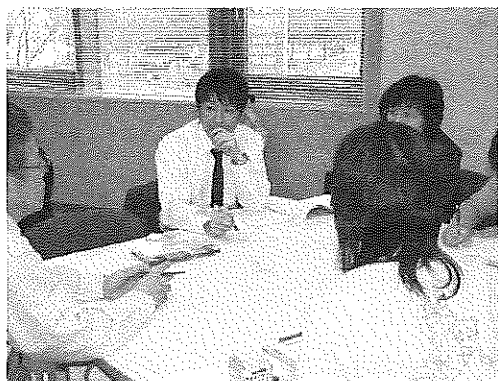
- ・グループワーク企画の経緯

部会のスタッフが異分野現場に出かけて得た「柔軟な発想力」体験は、地域につながることを難しく考えず専門性にこだわらない、何もしない自然体の発想でした。そこで身近な地域の異分野の方達と、Win=Win（お互いがプラスになる）の関係でコラボ企画する「ポスターづくり」を提案。

(コラボする相手は、ガチャポンとグループカードに隠れているアイデアで決定)

「活きのいい企画を作ろう！」 夢実現プロジェクト ミッションは一人一筆！

グループ名	コラボする地域の異分野	活きのいい企画
ゆりかもめ	神社仏閣・婦人会のおばちゃん	「おばちゃんギャフン大作戦」
びわこおおなまず	コンビニ・町工場働く人	「児童館オリジナルブランド開発プロジェクト」
信楽たぬき	スーパー・個人店店長、店員	「信楽たぬき町の店長グランプリ」
びわます	駅・パフォーマー	「子ども列車大作戦」
近江牛	老人ホーム・農家	「みんなでつくろう！ぬくとい農園」
近江米	コンビニ・職人	「児童館イレブン・いい気分」



『まとめ』

「心に新しいスイッチが入ったのでは？」

人と人との出会いで心のスイッチが入ります。夢は描くことで必ず実現していきます。

『最後に』

「児童館、一步踏みだせ異分野へ」

「児童館、地域にあふれる子どもの味方」

何かしてもらえる発想に置き換えることで、助けてもらう心地良さを知ること、異分野あふれる地域とつながる楽しみが広がりました。全国の皆さんと異分野の助言者さんとコラボした2日間。ぬくとい人のつながりで夢実現に向けて始動したいと思います。

皆さまからいただいた大きなご縁に感謝して「ぬくといおみやげ」を後日発送しました。

【第6分科会】「子どもが憧れる“カッコいい☆おとな”になろう」

援助者の基礎資質

子どもが「あの人のようになりたい」って憧れる大人って？子どもたちの豊かな感性を育てるには、どういう大人が必要なのだろう？楽しいワークショップを通じて、子どもの支援者に求められるコミュニケーションスキルを身につけよう。

【講師】 花輪 充 氏（東京家政大学准教授）

児童館・児童クラブの職員は、子ども達に頼りにされ、尊敬され、親しまれないといけません。では、そういう大人ってどういう大人なのでしょう？自分達は、そういう大人なのでしょう・・・
タレント性（才能）、アイドル性（求心力）、ディレクション能力（企画・演出）といった側面から、検証する分科会でした。

1 日目 「自己点検から自己転換へ」

『ワークショップ』

花輪氏の巧みな話術に思いっきり乗って、参加者が自分の心の中にある思いを出して表現する活動を行いました。

○劇遊び（「さんぽ」「たこあげ」「親子の買い物」などをテーマにした2人組での表現活動）

大人は「自由に！」といいながらも、いつの間にかまとまりを作ってしまう。実際に、大人が一人ひとり目を閉じて足踏みをする、いつの間にか自然と周りの人とリズムが揃ってしまいました。しかし、子どもが同じことをすると、一人ひとり違ったリズムになるのだそうです。子どもには“Only one”の世界が広がっています。大切なことは五感で思いっきり自分を表現することです。みんなで足を揃えることも大切ですが、独自感をもてることも大切です。

その独自の部分（自分というパーソナリティをしっかりと活かせるようになること）を育てる場が児童館・児童クラブではないでしょうか。

児童館・児童クラブとして、子ども達の反応や言動に対し、大人がどう向き合うかを考え直して見る必要があります。子ども姿を見て、自分達の考える型にあてはめようとしていないか？子ども達が自分というパーソナリティをしっかりと活かせるようになる為に、私達大人はいろいろなことにアンテナをはり“気付ける目”をもち、考え行動していくことが大切であると学びました。

参加者は、始めは大人目線の表現であり、どことなく表現力が限られていましたが、花輪氏の言葉がけから、次第に子ども目線の表現へと変わっていきました。五感で思いっきり自分を表現することが、とても楽しいことだと改めて気付かされました。

2 日目 「レシーブからプロデュースへ」

主体的に行動し、他者に働きかけて巻き込んでいく遊びとはどんなことだろうか、目的に向かって確実に行動することができるかを、アニメイムやグループワークを通じて学びました。

『アニメイム』（ウレタンスティックを使っての創造遊び）

①ウレタンスティックに触れ、素材感を味わう。

ユニークな素材に興味津々！“スティックを丸めてみる”“左右に振ってみる”“形を作って頭の上に乗せる”など・・・個人が思いのままに動かしました。

②ウレタンスティックで戯れる [個別的行為から集団的作業へ]

グループを作り、スティックをつなげました。

“電車ごっこ” “形をつくる(ハート、円形)” など

- ・一人ではできないことが仲間と一緒にすることで、遊びのバリエーションが増えたり、共感したりする新たな気持ちに出会いました。

③ウレタンスティックでオブジェを創造する(形状化) [交流と交歓する]

6～7人組のグループに分かれ役割分担をして、“人の顔” “動物” “チューリップ” など、一つのことを皆で創造しました。

- ・1人でも欠けると完成できなくなってしまう。他者とのコミュニケーションが必要不可欠でした。

④ウレタンスティックでオブジェを創造する(動作化) [共同と共有]

- ・動きのあるものに変化させていきました。

“人の顔(歌に合わせて表情を作る)” “動物(息を合わせて、歩く動作を作る)”

“チューリップ(歌に合わせて、ストーリー性のある動きを作る)”

- ・他者や状況に合わせて動きを変化させました。静から動へと動きを変化させる時に、声をかけあうことで表現方法も豊かに変わりました。互いの必要性に気づき、互いの個性を尊重し合うことが大切であることに気づきました。自分がどう立ち振るまえば良いか、瞬時に判断していました。児童館での子ども達との関係に通じるものがありました。



『グループワーク』

「かっこいい☆おとな」になるための戦略とは？

グループワークを通じて、児童館職員として子どもとどう向き合っていくのか、また、求められていることについて意見交換をしました。

○児童館・児童クラブ職員に求められること

- ①主体性・・・主体的に行動するとはどういうことか？子どもの援助者である、自分の主体性って何？
- ②求心力・・・他者に働きかけ、巻きこんでいるか？(求心力をもっているか？)
- ③目的を持って行動する・・・どんな目的をもって、子どもと向き合っているか？

『まとめ』

～ Body for self と Body for others のバランス～

Body for self 自分のためにあるべき姿。Body for others 他者のためにあるべき姿。

子どもは生まれながらにして、自分の為に一生懸命生きようとしています。その周りで、一生懸命その子の人生を豊かな人生になるよう、応援し支援するのが大人です。このバランスと関係はとても大事で、なくてはならないものです。人の愛情を受けて育った人間は、成長と共に他者のために生きようとするのです。

～ Body for self から Body for others へ・・・～

自分のためにあるべき姿から、他者のためにあるべき姿へと変わっていく・・・児童館・児童クラブに求められるのは、この流れができるよう、子ども達の応援と支援をすることです。

風呂敷に遊び一つ詰め込んで集合！みんなの風呂敷を広げたら、そこは遊びと出会いがてんこもり。「今これが流行ってます！」「この遊び、みんなに教えたーい！」など、ボールでもゲームでもOK！帰るころ風呂敷はきっと遊びでいっぱいです。

のみの市？ってなかなかピンッと来る人が少ないかもしれませんが、今でいうフリーマーケットのようなものをイメージしていただければいいのではないのでしょうか。風呂敷を広げたらそこがもうお店になって店開き。風呂敷を広げたら遊びがいっぱい。中から何が出てくるかは、開けてからのお楽しみ！もうそれだけで、わくわく、ドキドキしてきます。

多分、全国の児童館・児童クラブには私達の知らない遊びがいっぱいあるはずですよ。

それでは、扉を開けてみましょう。

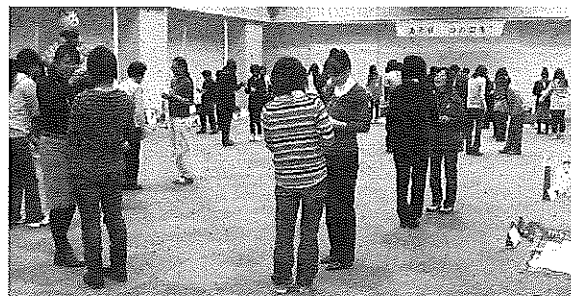
懐かしさいっぱいじゅず玉で作ったのれんをくぐり、参加される皆さんの顔は、少し不安そうでした。一体どのようにして“のみの市”が始まるのかな？児童館・児童クラブの遊びをうまく伝えられるかな？など、不安でいっぱいだったのではないのでしょうか。

そこで、ミニーちゃん（スタッフ）の登場！全員まん中に集まり、シール貼りじゃんけんゲームをしました。部屋中に元気な声が飛び交い盛り上がる中で、最後に一人残ってしまいました。顔には、シールがいっぱいで注目の的ですが、でも、大丈夫。唯一参加者全員に自分の名前などを伝えられるというラッキーな特典がありました。

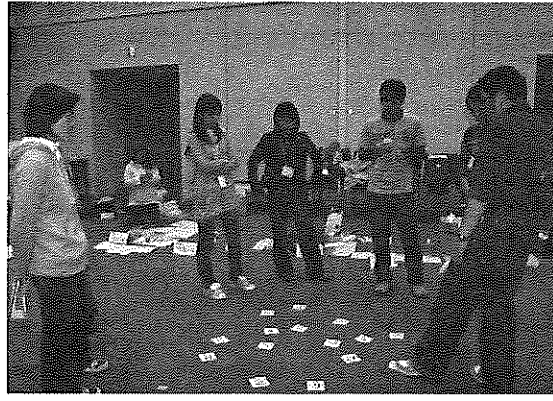
盛り上がったところで“のみの市”のスタートです。

店主は忙しく、工作の説明をする人、その場所で作りはじめる人、まさにのみの市が活気づき広い部屋も狭く感じる程でした。気が付くとまん中では、ゲームが始まり、参加して盛り上げてくれている人が自然と生まれていました。こういった雰囲気作りも大切なことだと思いました。

風呂敷を広げたお店では、新聞紙を使っての遊びや、ブローチ作りなどで輪ができていました。ペットボトルを使ってのゲームや、廃材を使っての工作などエコな遊びを取り入れているお店が大繁盛でした。



最後には短時間でしたが、4つに分かれてグループ討議をしていただきました。子ども達がいろいろな仲間と遊んでいる中で、友だちの大切さやつながりをもてた喜びを感じてほしいという意見や、また、廃材を使ってエコにつながる遊びができることなどを伝えたいという思いがたくさん述べられました。



財団法人児童健全育成推進財団の、古野由美子氏（札幌市青少年女性活動協会より出向）より2日間の総評をしていただきました。

子ども達や大人も楽しく遊べる遊びをはじめ、遊びというのは奥が深く「この遊びは、どういう意味があるのか。」「この遊びをすることによって、どういうストーリーが生まれるのか。」「この遊びの意図は何か。」など、ただ遊ぶのではなく深く考えて意図的に行うことでその遊びの価値をあげることに繋がります。この2日間で、たくさんの遊びの情報交換ができたと思います。これをこのままもち帰ってもいいのですが、皆さんの地域にあった児童館の遊びにつなげてほしいなと思います。と、温かいお言葉をいただきグループ討議を締めさせていただきました。



工作にしても、ゲームにしても相手がいないと始まりません。第7分科会に参加された皆さんの誰もが最初は不安であったと思います。でも、帰る時はいかがでしたか？

遊びを伝えた人も教えてもらった人も、笑顔で帰ることができたのではないのでしょうか。人と話すことが苦手な人も、伝えることから始まり、お互い話しをすることでコミュニケーションが自然ととれたのではないかと思います。

『最後に』

この第7分科会では、私達は一つの遊びから心が通いつながることで、友だちと結びつき笑顔があふれてくることや、安心して児童館で遊ぶことができるよう温かく迎え見守っていくことが、児童厚生員としての役割りではないのかなと改めて認識した2日間でした。



大きな湖に住むキラキラ笑顔の“鮎りん”がブラックバスデビルにさらわれた！このままでは、びわ湖の輝きがなくなってしまう！みんなで力を合わせて助け出そう！今あなたの勇気と頭脳と遊び心が試される時……。

1 日目

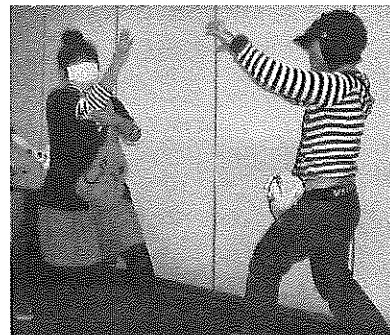
鮎りんがさらわれた！「しじみ」「なまず」「かいつぶり」「ヨシ」のグループに分かれて、伝、挑、友、感、舞の5つの部屋に修行に行き、ブラックバスデビルをやっつけて、鮎りんを救いだせ。



ブラックバスデビルと手下達

伝

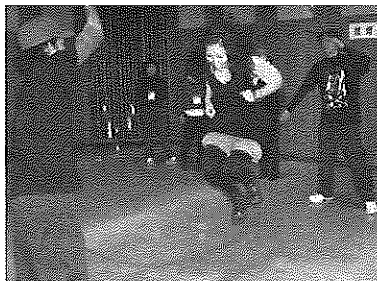
- 人に物を伝える力を養う○
- ・2人でジェスチャーし、それを当てる。
- ・難しい漢字を言葉で伝える。



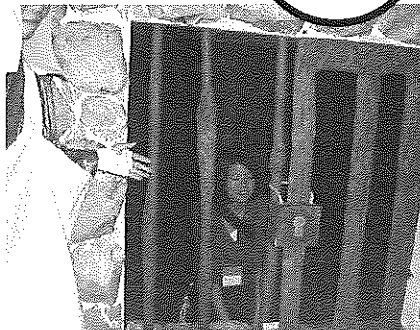
ジェスチャー
「ウルトラマンと
バルタン星人」

挑

- 挑戦しようとする心を培う○
- ・出来そうにないことも、あきらめずに挑戦してみたらできるかも？
- ・やってみて、できた時
「うれしい!!!」



Wダッチに挑戦中



仲間が“ろうや”に……

友

- 友だちを思いやる心を育てる○
- ・闇の峠を通り抜けている間に、仲間がさらわれていた。新聞の海から牢屋の鍵を見つけ、友だちを助け出そう！

感

フナ寿司を食べてみよう！



- 感覚を研ぎ澄ませる○
- ・同じ重さの米袋を当てよう。(重量)
- ・自分の思う5秒と、実際の5秒の誤差を測る。(時間)
- ・投げたものは、何かを当てる。(視覚)
- ・鮎寿司を、食べてみよう。(嗅覚、味覚)

舞

ブラックバスデビルをやっつけるためのダンス練習中



- 最終決戦は表現力の舞で○
- ・思いっきり舞って、ブラックバスデビルをやっつけよう。
- ・最後に修行で集めたニコニコ魚を、やっつけたブラックデビルに巻くつくと封印することができる。

2 日 目 「体験した遊びをもとに魅力ある遊びとは・・・今後に生かせるヒントを得よう。」

【コーディネーター】 敷村一元氏（NPO法人共育コーディネートグループSHAKE 理事長）

【協力者】 上木秀美氏（えひめこどもの城事業推進チームリーダー）

『1日目の遊びの整理』

子どもの立場で楽しみ、本気で遊んでみて気付くことや遊びにはどのような意味があるのかなどプログラムを体験して感じたことや得たことを伝え合いました。

『各遊びの意図説明』

想像力・協調性・達成感・感覚・一体感・コミュニケーションなど遊びの中にいろいろな要素が含まれていたこと、子ども達へ伝えたいことや思いを説明しました。伝える側からのねらいを聞き、実際はどのくらい伝わっていたか？各グループごとに数値として出しました。

『遊びの展開』

子ども達に実践する場合、遊びを通して伝えられることは何なのか？魅力ある遊びとは、どういふものなのか？この遊びにはどんな意味があるのだろうか？など、各グループでコーナーを選び改善点を考えて活動を組み立ててみました。

『まとめ』

コーディネーターより「私達は、演出家でありプレイヤーである。」「自分のボキャブラリーをたくさんもつことが必要である。」これを基に、自分の館にもち帰り自分なりに完成させたものを実際に創りやってみることが大切であること。参加者の皆さんがつながって、その結果を情報交換すればより効果は上がるとまとめていただきました。

『最後に』

遊びのおもしろさについて実感していただきたい。と思ったのがこの分科会の始まりでした。大会趣旨について話し合い、今の子どもに欠けている遊びをいろいろな分野から考え、それを「鮎りん」のストーリーに入れ込んでいきました。何度も話し合い、実践してみて壁にぶち当たり、また新たな意見を聞きにいたり、五感とはそもそも何なのかと調べ直したり、遊びを考え直したりして何度も積み重ねてきました。しかし、会場や時間などさまざまな制約があり、計画通りにできないという問題にもぶつかり、大会前日の夜遅くまで調整に追われました。そのような過程で、内容にこだわり深く考えることで、より遊びがおもしろくなり意味のあるものになっていくことを学びました。



出演者全員で

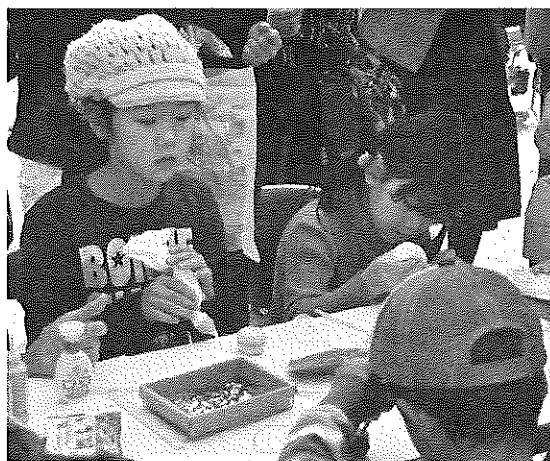
びわ湖畔に全国のあそびがあつまった！

【実施概要】

- <日 時> 平成22年11月20日(土) 10:30 ~ 14:00
- <場 所> なぎさ公園
- <参加団体数> 県内7団体、県外13団体
- <来場者数> 延べ1500名

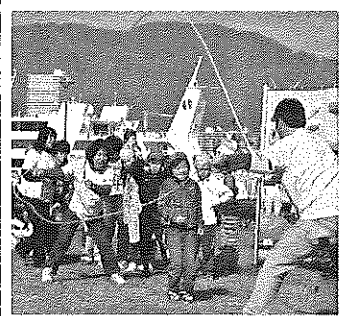
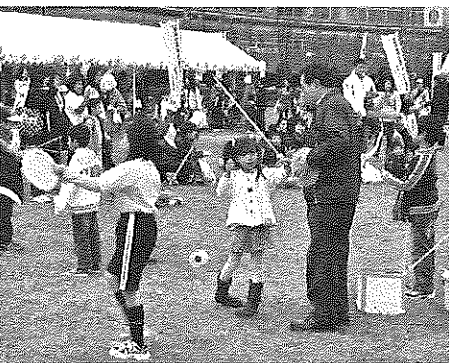
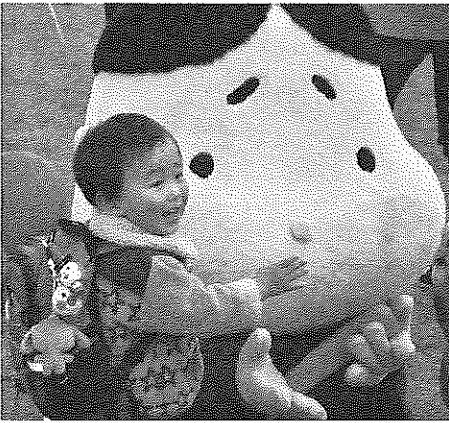
【店舗一覧】

	グループ名	内 容
1	あいちのじどうこうせいいん ねっとわーく サークルA	薬作り (元気の出る薬、元気の出るおもちゃを作ろう！など)
2	三重県児童館連絡協議会	真珠で携帯ストラップ作り
3	ももやま児童館・藤城児童館・北白 川児童館・住吉児童館・葵児童館	ポイントラリー ～きのうと京都(きょうと)、みらいであそぼう～
4	滋賀・大阪・広島・佐賀 指導員合同チーム	プラ板で携帯ストラップ作り、紙粘土でマカロン携帯ス トラップ作り、ブーメランであそぼ
5	平成20年度西日本ブロック 児童厚生員オールスターズ	牛乳パックや新聞紙を使って遊ぶ・作って遊ぶ 大縄跳び
6	広島市児童館	「にじいろのまほう」分光シートを使ったクラフト
7	Gifu ちまちまこうさく隊	革でストラップ作り
8	札幌市児童会館	「アンパンマンちょうちん」「パクパクワニくん」作り、 歌遊び
9	えひめけん やっちゃんけん！	「フィルムケースであそびつくせ！」ゲームや工作
10	今治市児童館	「みんなで挑戦！チャレンジカップ☆」
11	京都市深草児童館	いろんな風船を使って、バルーンを作る
12	福井県児童科学館	「ボウカイトをあげよう！」 ビニールと竹ひごで簡単に凧作り
13	すみれランド(滋賀短期大学)	輪投げ、メダル作り、オレンジリボン作り
14	滋賀県児童館連絡協議会	ヨシ笛作り、ブーブー笛、バグパイプ
15	滋賀県児童館連絡協議会	ダブルダッチ
16	滋賀県児童館連絡協議会	石跳び、手裏剣作り、手裏剣投げ



【ステージ一覧表】

	グループ名	内 容
1	志滋海社中	紙芝居
2	げんキッズ☆クラブ	大道芸（皿まわし、ディアボロ：中国独楽、ダブルダッチ）
3	ドリーマーズ	ジャグリング（ボール、ディアボロ：中国独楽、クラブ）
4	エンジェルママラス	コーラス
5	マジック団 ザ・スウィップ	ふしぎなロープ、ステッキ、リング、レコード、洗濯物、不思議なうさぎ、紙の復活、万国旗
6	Fatman Crew	ダブルダッチ



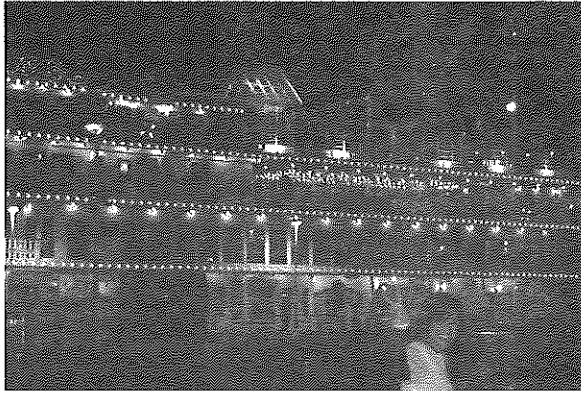
びわ湖畔に、たくさんの笑顔の花が咲きました！



交流会

【場 所】 琵琶湖汽船ミシガン 【時 間】 18:30 ~ 21:00

交流会では、児童館・児童クラブ全国大会史上初のびわ湖に浮かぶ「ミシガン」での船上大パーティーでした！地球上には、2万以上の湖が存在すると言われていますが、数十万年以上の歴史をもつ湖は、世界でもわずか10ヶ所程だそうです。そんな貴重な古代湖の一つがびわ湖！笑顔満載で全国の仲間との最高の瞬間（じかん）となりました。



これからミシガンに乗りま〜す！



可愛いピエロになって！！



豪華な船内で、滋賀の名産弁当を！



滋賀の出落ちコンビの漫才です！！

びわ湖は、日本でも有数のパワースポット。パワースポットは、ただそこに行くだけではなく、自分がそこで何を感じ、何を得たのか！？あなたはびわ湖で、何を感じましたか？そして、何かステキな宝物を見つけましたか？私もスゴイ最上級の宝物を、この全国大会で見つけました。

それは・・・“仲間”です。(???どこかで、聞いたような???)

交流会エピソード・・・ 「一人だけ陸に残った男の話」

出航時間が近づきましたが、まだ名簿には乗船していない人が数名いました。その時に交流会部の男が「私は、もし一人でも乗り遅れた人がいたら大変なのでここに残ります・・・。」しかし、担当部長は「今まで1年間一緒に準備してきたのに・・・乗船してください。」と説得しました。刻一刻と時間が過ぎていく中で、待ち人はまだ現れません。男は「私のことはいいから、早く行きなさい。」と強い口調で言いました。「でも・・・」部長は、あきらめきれません。男は、更に大きな声で「早く！船が出てしまう！」交流会イベントを仕切らないといけな部長は、後ろ髪を引かれながら「お願いします。行ってきます・・・」と船に飛び乗ったのでした。

そして次の日。陸に残った男は言った「一人陸にいてキラキラの船がだんだんこちらに近付いてきたら、楽しそうな音楽と笑い声が聞こえてきて、あ〜成功したんだなって安心したよ！」(この男、かっこいい)

閉会式

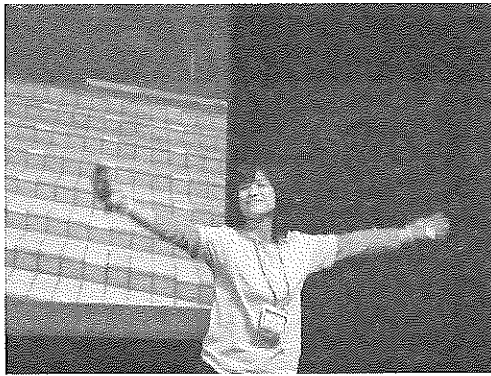
閉会式は、スタッフも参加していただいた方も気持ちを一つにして終わりたいと考えていました。大会2日間の「笑顔のスライドショー」もスタンディングでの「ハイタッチ」も、その気持ちを形に企画したものです。全国児童厚生員研究協議会会長千葉雅人氏の「全国の児童館の発議」も、これからの児童館の在り方をしっかり見据えて方向付けとなる力強い提言であり、全国の児童館が目指す道標となったことと思います。(次ページ参照)



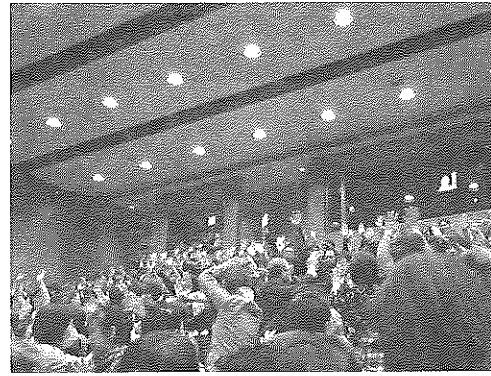
次回開催地、北海道の皆様へ！



「全国の児童館の発議」を発表！



心をひとつに・・・一緒に歌って



みんなで、ハイタッチ!!!

最後に、皆さんと一緒に「笑顔のまんま」が大合唱できたことや、滋賀のスタッフでお見送りさせていただいた時の皆さんの笑顔のお返しに、これまでの苦勞が一瞬で吹き飛びました。

♪笑顔のまんま～笑顔のまんま～！

そうさ人生生きてるだけでまるもうけ！

OH！僕が笑いを君にあげるから君の笑顔を僕にください～♪

この日の「笑顔」をずっと忘れないで、子ども達のホンマの笑顔に出会うために、全国の児童館・児童クラブの皆さん!!!頑張りましょう。ありがとうございました。



全国の児童館の発議

いま、政府では『子ども・子育て新システム』が検討されています。家庭や地域での子どもたちの生活や子育ての地域環境づくりの大転換期にあたり、児童健全育成を推進する私たち児童館・児童クラブ等関係者は自らその社会的役割を認め、真の子ども・子育て支援に資するため、第一〇回全国児童館・児童クラブびわ湖大会開催に際し、次の通り発議します。

一、児童館では、

「放課後児童クラブ」と「放課後子ども教室」の両事業にかかわり、地域で『放課後子どもプラン』を推進します。

一、児童館では、

「地域主権」を尊重し、地域における児童館事業の格差を是正するためのゆるやかな『児童館ガイドライン』を希求します。

一、児童館では、

児童厚生員が乳幼児から小学生、高校生まで、

自由で自主的な遊びの活動拠点として、また、安心安全な居場所として積極的に取り組みます。

一、児童館では、

地域の総合的な子育て支援の拠点施設として、よりきめ細やかな事業を提供し、児童虐待への対応と予防を強化します。

一、児童館では、

学校や行政諸機関と連携し、子ども・家庭・地域の諸問題に対応できる職員の専門性の確立を目指します。

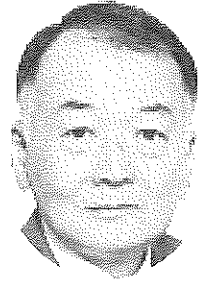
平成二十二年十一月二二日

第一〇回 全国児童館・児童クラブびわ湖大会 参加者一同

全国児童厚生員研究協議会

“びわ湖大会” に寄せて

財団法人児童健全育成推進財団 理事長 鈴木一光



オープニングのテーマは「水の恵に感謝」

「水」は時宜を得た世界的な関心事。舞台の袖で開幕前から見て感動しました。慌ただしく動き回るスタッフ。予鈴が響くと一気に緊張が高まり演技をそらんじながらバタバタとステージ上に立ち並ぶ子ども達と大人達。彼らの立ち位置を確認する児童厚生員。「小道具を忘れた」と小声。小走る母親。緞帳の間から客席を見ると席がびっしり埋まっていました。「よく集まったなあ～。目標の800人は充分達成している…」としみじみする。

滋賀県と本財団を主催に、厚生労働省、全国社会福祉協議会、こども未来財団、児童育成協会（こどもの城）等々の後援名義を36団体から取得して、県内児童館設置16市町の自治体課長もすべて出席してくれました。実行委員の通年に亘る苦勞が推察できるものです（このような根回しを苦手とする人達も多いのに…）。その甲斐あって大会に大勢の県民を集め、自治体の耳目を集め、遊びにコンビニで市民を約1,500人集め、関係者が熱い想いを交わす。目的は達成されました。乏しい予算のため会場は三か所に分散を余儀なくされましたが、手配りの良い運営に行き違いもありませんでした。

また一、あの『琵琶湖周航の歌』の…あの日本一の湖を、外輪船ミシガンに乗り夜を滑空しながらの意見交換会は、オープニングのテーマにつながり忘れられない思い出になりそうです。

「明るく自らを省みる会」

この大会は平成7年2月11日（建国記念日）、児童厚生員有志の呼びかけに呼応して、全国の児童館・児童クラブの志を同じくする者たちが、東京に手弁当で参集して開催したものが第1回です。自費で休暇取得も困難な仲間のために2年に1回開くことを原則としました。大会の目的は、児童館の活性化に資するための児童館の広報と、自らの資質研鑽のための多様な情報交換と交流です。そもそも児童館は福祉の名を体現する施設として「子どもは歴史の希望」という理念が先行した形で児童福祉法に謳われました。平成に入った頃から高度経済成長が終焉し、経済の低迷を背景に、都市化・工業化・消費化などが子どもに及ぼした悪しき影響を、地域福祉施設として解決していくことが期待されてきました。しかし、子どもに「遊びを与えて」その発達を支援することの具体的な意味や、保護者を含む地域住民と共に子どもに関わることの狙いなどは、学歴加熱や共働きの増加と反比例して理解されず、一方、職員も遊びの提供と施設内自己完結型を求めるきらいがありました。

「児童館の再構築を！」

さて時は移って現在、財政悪化を伏流に政府は地方主権という架空の概念を立ち上げて、空洞化にあえぐ基礎自治体に児童館も委ねようとしています。しかし、国の役割と責任（ナショナルミニマム=国民的最低限）と、市町村の役割と責任（コミュニティオプティマム=地域社会最適水準）とは、「あちら立てればこちらが立たず」という二律背反（トレード・オフ）の関係ではありません。児童館の視点から全国の基礎自治体を概観しますと、児童館活動に格差があり、予算削減のみを目的に指定管理者制度に移行したり、老朽化を機に児童館の廃止を指向するという市町村があります。今こそ、地域における子育て支援の拠点としての児童館の機能や児童館職員の専門性を明確にした、国の「児童館ガイドライン」を作成し、市町村に示すことが国家の使命だと思われます。そこで「児童福祉法とこれからの児童館を考える」第1分科会ではこの問題について2日間に亘り話し合いました。これを基に全国児童厚生員研究協議会会長が全体会にて「全国の児童館の発議」として提案し全員の賛同を得ました。びわ湖大会で全国の児童厚生員が、国の「児童館ガイドライン」を作成することの必要性につき共通認識に至ったことの意義は大きいものがあります。

実行委員の皆さま、参加して下さった方々、誠にお疲れ様でした。

でっかい琵琶湖が輝いた!!

全国児童厚生員研究協議会 会長 千葉 雅人



【最高のバトンパス】

11月20日(土)午前9時前の大津市民会館。まだ開かない玄関の前に、どこからともなく人が集まってきました。その数はどんどん増えて、歩道にあふれるほどの人数になりました。びわ湖大会スタッフの集合の光景だったのですが、これを見て私はびわ湖大会の成功を確信しました。スタッフは他にも、あそびにコンビニ会場のなぎさ公園や、分科会会場のピアザやコラボでも準備を始めていたはず。全国の仲間を迎えるために、ものすごい数のスタッフが動いていることに感動しつつ、大会が無事にスタートする安心感をもつことができました。

びわ湖大会を通して感じたのは、安定した運営だということでした。それは、プログラムが予定通り進んだ、という意味ではありません。おそらく、すべての場面でスタッフの皆さんのゲストを「もてなす」という気持ちが安定していたんだと思っています。会場の分散・移動など運営上の苦労があったことと思いますが、参加者は安心して、迷うことなく大会を楽しむことができました。全国児童館・児童クラブ大会は、平成7年の東京に始まり、京都、広島、愛媛、石川、東京、神戸、沖縄、岩手とバトンをリレーして、記念すべき第10回をびわ湖大会として開催することができました。現地実行委員会の皆様のご尽力に感謝いたします。

【全国児童館・児童クラブ大会について】

ここで改めて「全国児童館・児童クラブ大会」についてご紹介しておきたいと思います。この大会は、全国児童厚生員研究協議会と児童健全育成推進財団が「この指とまれ」の役をして、大会を開催する都道府県を募ります。名乗りを上げた都道府県には、大会の基本となる開催目的を踏まえた計画を作成してもらいます。開催目的は以下の4項目です。

- ① 全国の児童館職員・児童館関係者の交流と、事業に関する研究協議の場とする。
- ② 全国の児童館・児童クラブ職員の資質の向上の場とする。
- ③ 児童館・児童クラブを広く社会にアピールする場とする。
- ④ 時代に即した児童健全育成活動を模索する場とする。

これまで開催した大会はすべてこの開催目的を基本に計画を立てているので、統一感をもった内容にすることができています。

閉会式で『全国の児童館の発議』を提案しました。今検討が進んでいる「子ども・子育て新システム」の中で児童館が果たすべき役割と、私達自身の決意を示したものです。このような、社会に対する積極的な働きかけを行うことも、この大会の大きな目的のひとつなのです。

【バトンは北海道へ】

「びわ湖大会」がつかないバトンは、一気に北上して北海道に渡ります。びわ湖大会で出会った多くの皆さんに、来年10月札幌で再会できることを楽しみにしています。

「びわ湖大会からのお土産」

びわ湖大会実行委員長 吉村 潤子



晩秋のびわ湖のほとりに、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地からたくさんの方々にご参加いただき、本当にありがとうございました。

お陰をもちまして2日間の大会を、無事に終了することができましたことを心から感謝申し上げます。

昨年岩手大会では、中身の濃い大会を目の当たりにして、1年後、私達にどんな大会ができるのだろうか、期待と不安でいっぱいでした。何から準備していくのか？滋賀らしさって？開催趣旨はどうする？実行委員会の組織はできたものの、ちゃんと機能しているか？などなど、何もかもが手探りでしたが、開催までの道のりの中、私自身貴重な体験をさせていただき大きなお土産をもらいました。

①「日々意識すれば、ヒントは見つかる！広い視野をもつことの大切さ」

5月に東京で行われた児童健全育成推進財団の健全育成専門研修会事業推進講座に参加させていただき厚生労働省の行革の中での、児童館の現状と今後の期待について話を聞きました。その後、日々の業務である地域の会議にも、広い視野と危機感をもって出席することで、地域の中でもっと存在感のある児童館になるためのヒントがあることに、気付くことができました。

②「子どもと正面から向き合う大切さ」

日常業務をしながらの大会準備は大変でした。しかし、職員の意識が子どもに向いていないと敏感に感じとるものです。改めて子ども達が来館した時、「待っていたよ！」と正面から向き合い、一人ひとりの心を受け入れようとする姿勢の大切さを学びました。

③「みんな違ってみんないい！違いを認め合う大切さ」

滋賀県児童館連絡協議会は、法人経営の児童館や公設児童館などが集まって組織が成り立っています。今まで合同で事業をしたことがなかった児童館もありましたが、大会を成功させたいという気持ちは一つであり、互いの頑張りを受け合い組織として折り合いをつけていくことの大切さも学びました。

④「地域にしてもらおうという視点からではなく、共に楽しむことの大切さ」

私共の児童館の課題はマンネリ化した事業をどう変えていくのかだったのですが、第5分科会に参加して、今まで地域に何かしてもらおうことばかりに意識がいていたことに気付きました。児童館の基本である「いろいろな人が出会い、共に楽しむ」ことの大切さを再認識できました。

以上大会を振り返って得たことを思いつくままにあげましたが、参加された皆様それぞれに、自分を振り返り職場を見直す中で、明日からの元気とやる気もてるびわ湖大会であったなら幸いです。地域福祉のコア施設として、子ども達の「ホンマの笑顔」が保障される児童館・児童クラブへの改革は、具体的な目標をもってあきらめずに取り組み続けていくことが大切です。そして、児童館の強みである、0歳から18歳まで、継続したかわりができる施設であること、いろいろな人と出会いつながっていける施設であること、学校と違って自由に企画できるなどの特色を生かして、子ども達にとって意義ある居場所づくりができるよう共に頑張っていきましょう。最後になりましたが、財団法人児童健全育成推進財団、全国児童厚生員研究協議会をはじめ関係機関の皆様には、多くのご支援ご指導をいただきありがとうございました。次期開催地である北海道大会の成功をお祈りしています。

「第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会を終えて」

滋賀県児童館連絡協議会会長 里田 春男



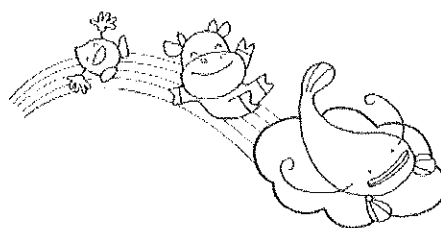
秋晴れのもと、第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会を滋賀県で開催できましたことに感謝申し上げると共に、盛会裏に終えることが出来たのは、大津市はもとより各自治体の全面的バックアップがあったからこそと感謝申し上げます。

運営委員会の皆さんや各部会の皆さんには、プレ大会から本大会当日まで、日々の業務が忙しいにもかかわらず、企画立案・細部に至るまできめ細かな計画と準備をしていただきありがとうございました。

「あそびにコンビニ」では、各県からの出店や県内スタッフによる企画、また当日は県内の子ども達もたくさん参加され、盛大で意義深い事業となりました。開会式のオープニングの演出も、びわ湖、滋賀県、子ども達の笑顔、この大会のテーマを語らずも参加者に感じとっていただけのものでした。

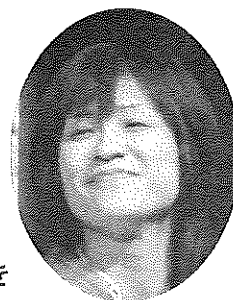
交流会では、「外輪船ミシガンで湖上交流会」など、びわ湖ならではの企画で、多くの参加者に感動を与えることが出来ました。8つの分科会では、それぞれのテーマごとに、子どもの「心の貧困」にどう向かい合うかについて熱心な討議がなされました。

滋賀県内でも、行政改革の波のもと、各種公共施設の在り方が問われています。児童館の「今後の在り方」についても検討しなければならない時期です。こんな中、全国児童館・児童クラブびわ湖大会が開催され、全国の児童厚生員や児童にかかわる先生方、関係者が会して、子ども達のために「何が出来るか」「何をしなければならないのか」について意見を交わせたことは大きな成果だったと思います。この大会の実施にあたり、ご指導、ご協力いただいたすべての皆様に深く感謝すると共に、心よりお礼申し上げます。



「児童厚生員が『もしドラ』を読んで“マネジメント”してみたら」

企画委員長 木戸 玲子



第1回の東京大会の記事を拝見したのは、私が児童館に勤め始め、3年が過ぎた悩み多き時期でした。一緒に考える仲間がいることは「心強いなあ」という憧れをもち、第2回の京都での大会に初めて参加しました。大会のエンディング曲「田園」が流れる中、いつの日か滋賀でも全国大会ができる日が来るかなあ…その頃の私は、会場の最後尾で頑張っている若手厚生員の活躍を見守っているだろうな…そんな風に考えていたことを強く覚えています。それが、思っているよりもずっと早くに、その開催にかかわることになったのでした。

“滋賀で全国大会を”…。決定までには段階があったでしょうが、“できる”とか、“こんな風にやりたい”とか考える前に、“やる”ということだけが決まっていました。滋賀県児童館連絡協議会としては、5年に一度の「児童館まつり」を県内児童館で取り組むことはあっても、日頃は役員会や研修等で一部顔を合わせる程度であったため、開催や運営には不安がいっぱいで、県内の児童館関係者全員の積極的な参加には、各自のモチベーションや各館の体制、所属機関の理解と協力など踏むべき段階が山積みでした。

そんな時、話題になった“もしドラ”（岩崎夏海著「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」）に出会い、甲子園優勝を目指す野球部を、全国大会開催を目指す滋賀の児童館に置き換え、組織とは何かということや、またそれを運営するためにはどうすればいいのかということなど、いろいろなつまずきや自分自身の役割を考えながら、大会をマネジメントする考えで進めることにしました。全国大会の“顧客”とは誰を指すのか？組織の一人ひとりがやりがいを見出すには？人の強みを生かすのは？専門家の通訳をすることは？イノベーションは？そんなことを考えながら、一人ひとり、そして組織の“生かす”“つなげる”“伸ばす”を大切に、各部会の調整と全体としての流れの橋渡し役として、私自身も多くの壁を乗り越えることになりました。何を目指していくのか、そのために何が必要なのかが、なかなか決まらないことへの焦りや確信がほしくなる中、じっくり考えることや本当に必要なこと、省略しない方が良いことなどを見極め、決定までの試行錯誤をあえて“産みの苦しみ”として真摯に受け止めました。そしてそのことを多くの仲間と共有して、共に成長していける道を歩き続けました。アンテナを広げ、新しい発想に期待し、議論を繰り返すことは本当に苦勞のいることでした。そんな中、児童健全育成推進財団や全国児童厚生員研究協議会の先生方の協力をいただき、「児童館ミーティング」を通して、大会の意義や目的、内容など素朴な疑問から、実際に進めていくための方法論まで数多くの相談に乗っていただいたことや、全国の仲間からの励ましや期待は大きな力となりました。また、県内児童館も財政難や市町村合併に伴う縮小や見直しなど取り巻く状況が厳しい中、会議への出席、日常業務以外の大会に関する準備や連絡など、周りの理解と協力がなければ仕事を進めていくことは困難なことでした。しかし、大会準備を進めていく長い道のりと県内の仲間が手をつなぎ、共に一つのものを作り上げる経験を通して、関係機関や地域の方々、来館児童や保護者、ボランティアなど多くの方との出会いと理解や協力が得られ、つながることや共に作り上げる喜びや感動をいただけたことに感謝しています。

不安と期待の中迎えた大会当日、大津市民会館の気の遠くなるような数の客席を埋め尽くす人々を見て、こみ上げるものがありました。そして、2日間3会場を走り回り迎えた閉会式、エンディング…大会準備期間中に流した涙も、大会中こみ上げるてくる涙も、すべてが笑顔に変わり、エンディング曲「笑顔のまんま」の歌に乗せてお礼の言葉を述べる私は、もう楽しくて仕方なくなっていました。児童館には多くの課題が残されていて、やるべき仕事はまだたくさんあります。それに向かって一緒に進んでいく仲間がいること、そして高いクオリティをもってその仕事を進めていくことを胸に、新たな一步を踏み出します。“子ども達のホンマの笑顔に出会うために”

「全国の仲間が集まって息づいた分科会」

分科会部長 木戸 玲子



全国大会での分科会がどんなものなのか、限られたスケジュールの中でどれだけのことができるのか、なかなかイメージがつかない中、まずは大会テーマと大会趣旨を元に、今の子どもに足りないものから、“子どもの心の貧困”をどう考えたらよいか話し合いました。そこから見えてきた児童館・児童クラブで取り上げるテーマを8つに分けて準備を進めました。与えられたテーマをどう捉えるか、2日間をどう展開していくか、つい近道をして自分達のもっているものだけで勝負しようとするところを、改めて本を開き、研修会や関連機関の事業に足を運び、方々に電話をかけて話を聞いていただきながら、各分科会のリーダーが中心になって進めてきました。その中で気付いたのは、「自分達の足りていないもの」だったのです。でもそれを、いろいろな人の力を借りることや、新たな学習とメンバーの協力で自分達の力を伸ばし補っていきました。人と話すことで自分の思いに気付き、たくさんの意見を聞くことで新しい発想が生まれ、毎日にチームでの動きにまとまりがもてるようになってきたのです。

各リーダー達は、テーマと時間とメンバーのそれぞれの思いの板挟みになって余裕がなかった時期もありましたが、大会を迎える頃には、無理なお願いにも大きな気持ちで対応していただき、児童館職員に必要な計画性と臨機応変な対応でさまざまなトラブルを乗り越えていくことができました。会議の持ち方や研修の持ち方など、学んだことも大きかったです。

全国の皆さんの参加によって、はじめて分科会が息づき、生きた意見交換や熱い思いのぶつかり合いなど、心が通い合う温かい空間が作られたことが何よりも感動でした。

普段は少ない職員の考えだけに収まりがちな児童館運営、あるいは子どもへの対応も、これを機会に多くの仲間と共に話し合い、意見交換し合って、広い視野と考えをもって対応していけるように、今後の滋賀県児童館連絡協議会の研修等にも生かしていきたいと思えます。

「全国大会を終えて見つけた宝物」

記念事業部長 伴 由起子



小さな滋賀の組織である記念事業部員のほとんどが、全国大会への参加経験が少なく、大会イメージも膨らまず、漠然とした中からの出発でした。

大会趣旨とオープニングの構成、講演の講師とのつながりなど、考えれば考えるほど遠ざかる気がしました。記念事業部はやることが多く、県内の厚生員であっても、面識のない者同士でなかなか本音が出せない会議が続く、決まっていけないことに少々苛立ちがありました。またそれぞれおかれている立場や設置団体の違いなどもあり、なかなか会議に出席できない現状もあり大会を開催できるのかと心配をしました。

しかし、大会趣旨をもとに、豊かな心を守り育てることや、未来の児童館の重要性などから、「笑顔」「滋賀らしさ」に的を絞り、笑顔写真のスライドショー、笑顔写真展示、児童館の紹介、県内児童館来館者によるオープニング、石井裕子氏の講演などが決定し本格的に動き始めました。

部内で講演の内容や調整、参加者の確保、時間配分や子ども出演者の練習、他の部会との連携等など、時間はどんどん過ぎて行きました。

通常業務と大会の仕事を両立できたことは、これからの児童館運営や人間関係の確立に大きな力をいただいたと感じます。この成果や、大変な時期を皆で乗り越え大きなことを成し遂げたという達成感は、新しくできた同志、仲間を大切にいろいろな場面で発揮できることを信じています。これを宝物に笑顔で接することを忘れず、児童館の存在をアピールし、来館者すべてに幸せな笑顔になっていただけるよう日々精進したいと思います。

「またやりたいな、あそびにコンビニ」

あそびにコンビニ部長 家森香代



11月20日朝5時、天候は晴れ、風もなし。『あそびにコンビニ』屋外での実施決定！さあ、それから業者によるテント設置、準備してあった物品の搬入・設置、会場の飾りつけなど大忙しです。

そして、いよいよオープニング。晴れ渡った空の下、青々と広がるびわ湖をバックに県外からの大会参加の皆さんをはじめ親子連れ、お孫さんを連れのおじいちゃんやおばあちゃん、ご近所の方々など予想を上回る来場者とその笑顔に、忙しい中にも大会スタッフは嬉しい悲鳴でした。1年前の第1回あそびにコンビニ部会の時、誰がこの様子を想像できたでしょうか。部員13名は同じ県内の児童厚生員とはいえ初めて会う人、大会初参加の人も多く、なかなか『滋賀のあそびにコンビニ』の共通したイメージをもつことができませんでした。だから、「何がしたいか、何ができるか」を何度も話し合いました。でもそれは、それぞれ自分の館の事業をこなしながら集まり、議論を重ね作業を進める内に、互いを仲間と認め合い、思い描くものが重なり形を成してきたのですから、決して無駄な時間ではありませんでした。また、締切の期日が迫っているのに出店の応募数が少なく、知り合いや関係機関を通じて声をかけてもらうなどハラハラしましたが、それぞれ忙しい中を快く応じていただいた方々のお陰で、スペース・時間ともにピッタリとなりました。

この「あそびにコンビニ」を終えた今、出店・出演いただいた方々、遊びに来てくれた子ども達、ボランティアの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。皆様のおかげでみんな「笑顔のまんま」でいられました。ありがとうございました。また「あそびにコンビニ」やりましょうね。

「全国大会びわ湖物語」

交流会部長 村田佳代



私は、何度も全国大会に参加しています。かの地でたくさんの抱えきれない程の「おもてなし」をいただいていたので、今回はそのおもてなしに笑顔を添えて皆様に恩返しをしたい！と思っていました。交流会は、びわ湖大会でしか成しえない“オンリーワン”のものにしたいという気持ちと今回の大会で大切にしていた「笑顔」をどうしても形にしたかったのです。交流部会は、他の部会より“遊び心・楽しむ気持ち”を要求される部会でありました。他から見れば気楽で楽しそうな感じですが「人を楽しませる」「笑いを生み出す」というのはなかなか大変な作業です。それ故に、会議は皆真剣にその「遊び心」を企画・立案そして、それを当日の形にするために奮闘しました。びわ湖大会はやっぱり全国の皆様にどうしても「びわ湖に浮かんでもらいたい。」「湖上で語りあっていただきたい。」と思っていました。ミシガンで交流会をする！と決めた日から、狭さとお弁当との格闘が始まり・・・何度もミシガンを下見させていただき、手作りプログラム隊・横断幕隊・ステージ隊など、それぞれがチームを組んで日増しに「精一杯のおもてなしの気持ちで全国の仲間をお迎えしたい」という気運が高まりました。

回を重ねる毎に皆の距離がどんどん近くなって、当日は緊張の中にも目一杯楽しんでいた部員の姿がありました。初めて参加した若い厚生員は「全国の人達は、皆すごく元気だった。右も左もわからなかったけど、いろいろな人との出会いが宝になった。」と感慨深く話してくれました。一人ひとりの中に頑張った自分と全国の仲間との絆が、きっと自分自身の一生の宝物として燦然と輝き続けることと信じています。感動の積み重ねが、ステキな人生を創るキーワード！！これからも堂々と、胸張って笑顔で生きていけます。全国の皆様、ホンマにありがとうございました。

「ピンクチョッパー帽子」の交流部長

「Journey through the Decade」

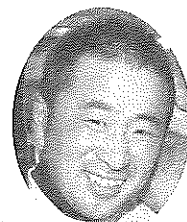
広報部長 寺内章博



この報告書が皆様のお手元に届く頃に、私の全国大会がようやく終わります。児童館に配属になり、たった2年の私が広報部長なる役を仰せつかり不十分なながらも、児童厚生員の諸先輩方のお力に助けられここまで来ることができた次第です。全くの0からのスタートでしたが、広報部は、開催要項、チラシ、案内看板、当日の資料冊子そしてこの報告書まで、たくさんの方の目にふれる物ばかりで、重圧がありました。わからない中で作成計画を練りそれに則って作業を進めてきましたが、突発的なこともあり、なかなか進まないこともありました。しかし、部員の皆様の温かい言葉と、作業分担により確実に前に進んでいくことができました。また、部員の特化した得意分野が、大いに広報部の原動力になりました。今大会のメインキャラクター原案やイラストも部員ですし、チラシの原案やレイアウト・作成もです。冊子も、印刷以外は全て広報部の手作りの、血と汗の結晶です（笑）閉会式で、ご覧いただいた笑顔のスライドショーはいかがでしたか？舞台から、皆さんの笑い声が聞こえる度に、すごく嬉しい気持ちと感謝の気持ちがあふれていました。涙ぐんでいたのは、誰よりも早かったと思います。皆さんの、笑顔の写真をたくさん撮らせていただいた中から、3次会の後に作成したものですから、キチンと出来ているのかすごく不安でいっぱいでしたので・・・報告書では、各部の思いをすべて載せたかったのですが、ページ数や制約上載せきれなかった部分もあります。締め切りなど厳しいことも言わせていただきましたが、各部違えど全国大会への思いは同じ中で、真剣に作成しているからですのでご了承いただきたいと思います。最後になりますが、次の11回大会。更に10年後の大会、更にその先の大会に、学ばせていただいたことを胸に刻み、これからの全国大会へ旅に出たいと思います。

「全国大会を終えて」

事務局 保木誠司



今、びわ湖大会を終えて感じることは、普段の児童館活動の中で用意されている周りの環境というものに「当たり前なこと」はないということです。活動に必要なお金や活動場所、参加者の確保などお願いすれば用意してもらえられませんか。しかし、その陰では誰かが調整に走り回り、汗をかき、頭を下げてなんとか間に合わせているものもあります。この大会を通してそのことに気付けたことは、今後子ども達の前に立つ者として、本当によかったと思います。

私には、もうすぐ2歳になる娘がいます。自分自身が親になって言われたことの中に「言ったようにはならんけど、やったようにはなる。」という言葉があります。昔から言われている言葉だと思いますが、乳幼児との活動でも、中高生との活動でも、それは同じではないでしょうか。大人の私達が今の環境に慣れすぎて、何不自由ない環境を当たり前とってしまったら、子ども達も同じように感じるでしょう。

その中で育った子ども達の心が貧しいというのなら、それはそんな心を育てた大人の心が貧しかったということだと思います。このびわ湖大会は、私達大人が日頃から感謝の気持ちを忘れずに、自分自身の行動で子ども達の心を育てていきたいと改めて思う大会でした。

最後になりましたが、お忙しい中大会準備に奔走してくださった皆様、並びにびわ湖大会にご参加いただいた全国の皆様本当にありがとうございました。これからも事務局の一員として滋賀県の児童館活動を盛り上げていけたらと思いますので、今後共々指導の程よろしく願いいたします。

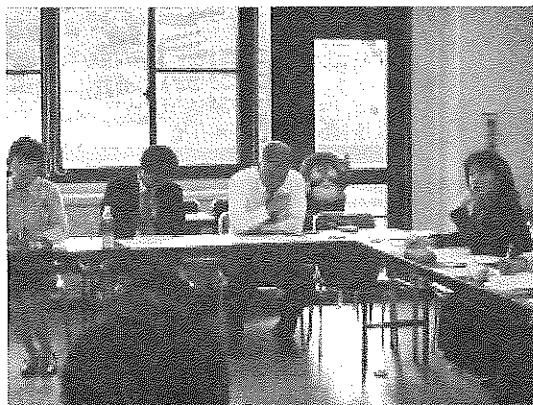
大会までを振り返って



6月、児童館ミーティングにて



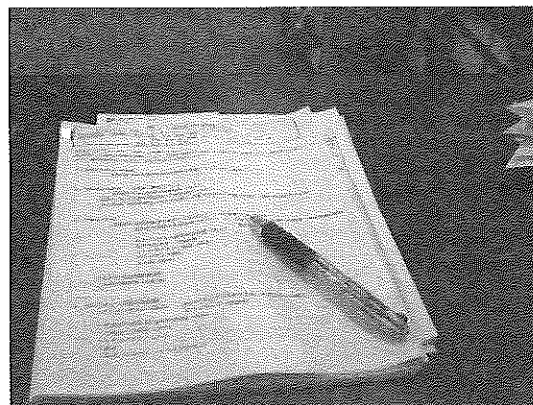
北海道に渡ったタヌキと、いつも一緒でした。



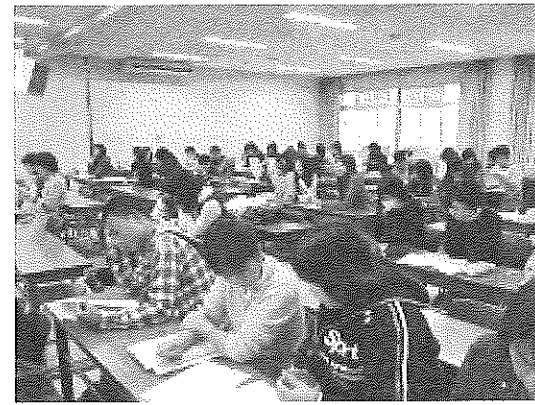
運営委員会でも、タヌキが見ていました。



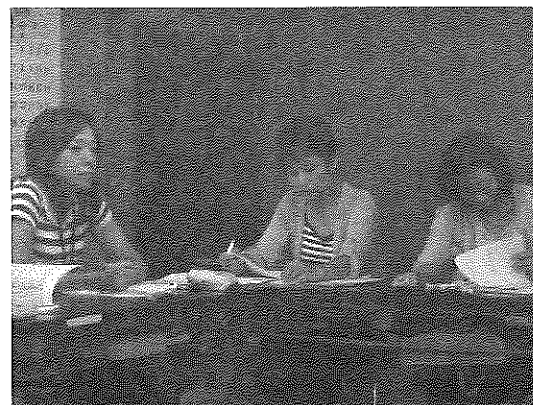
オープニングの練習風景



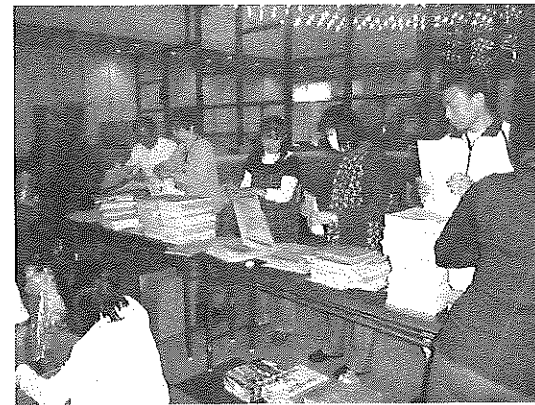
会議の度に、資料がどんどん増えて・・・



講義を受けてる??? ボランティア説明会にて



企画委員会での、珍しく? 真剣な、江の三姉妹?



前日準備! しかし... 思わぬ落とし穴が...

設問 5. 分科会に参加された方にお聞きします。

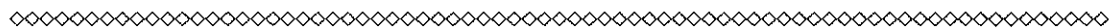
もう一つ分科会を設定するとすれば、どのようなテーマがよいですか？

- ・ 地域をまき込んだ「あそび」プロジェクト
- ・ 父親の参画
- ・ 産まれてから成人するまでのとぎれの無い子育て支援方法
- ・ 大型児童館のあり方、地方児童館のあり方、都市型児童館のあり方
- ・ 障害をもつ子や情緒的に不安定な子の対応
- ・ 安全管理
- ・ 小学校、中学校などとの連携について
- ・ 分野の違う講演
- ・ 児童館と保護者とのかかわりについて
- ・ 職員本音バトル
- など



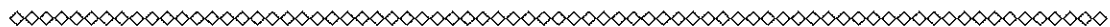
設問 6. 全体的なご意見、ご感想をお聞かせください。(自由記述)

- ・ とても充実した2日間だった。全国の方と交流ができ、2日目で成長できた。早く自分の児童館に帰り、子ども達に会いたい。
- ・ 先生方の勢い、気持ちを感じて滋賀や他地域も含め、児童館の未来は明るいなぁと実感した。
- ・ 事業仕分けの行方が気になっていたのも、ごあいさつのお話できなくてちょっぴりのぞくことができた。私達はコツコツすごすだけで良いのか？もっとメディアなどで紹介してもらって全国にアピールすべき。
- など



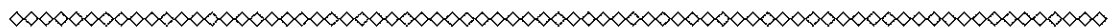
設問 7. びわ湖大会実行委員会に一言お願いします。(自由記述)

- ・ 準備から大変だったと思います。笑顔とあいさつで迎えられて嬉しかったです。
- ・ 一生懸命さが伝わってきた。一つ困ったのは会場とホテルが遠かったのも、ホテルから会場までのアクセス、時刻表とかかわるとありがたいです。
- ・ 感動のオープニング びわこのつながりを感じました。仲良い県ですね。
- ・ 日々忙しい中でふと立ち止まって考えたり、基本に立ちかえる機会って大切ですね。
- ・ 心から笑い、明日からの仕事をがんばろうという気持ちをおみやげに帰れます。
- ・ 楽しかった。スタッフの皆さん芸人ですね。ビックリしました。また会いたい。など



設問 8. どちらの都道府県からいらっしゃいましたか？よろしければお答えください。

・ 滋賀県	41名	・ 京都府	35名	・ 愛知県	28名
・ 石川県	23名	・ 北海道	14名	・ 大阪府、三重県	8名
・ 兵庫県、鹿児島県	7名	・ 岩手県	6名	・ 愛媛県	5名
・ 東京都	4名	・ 埼玉県、福井県	3名		他



設問 9. ご参加された感想をご自由にお書きください。

- ・ 記念講演はとても良かった。思わず・・・涙がでました。
- ・ トンちゃんの観察眼、実践、強い信念を見習いたい。
- ・ 自分自身を省みるいい機会になり、一歩成長した気持ちになりました。まだまだ時間がほしい。
- ・ 会場の場所が遠かった。分科会は移動が大変だった。遊びにコンビニの準備数が足りない所が多かったがそれだけ大盛況だったかと思う。
- ・ 交流会がお弁当って思いましたが工夫が見られて感動しました。美味しかったです。
- ・ 全国大会に参加できることに喜びを感じ、新しい出会いもあり、また次回までがんばるぞーとパワーをいただきました。

編集後記

全国大会までの1年間。そして、大会後の2ヶ月・・・この報告書がようやく完成に至りました。広報部という活動を通じて、全国大会にかかわりをもてたことは、ものすごく勉強になりましたし、たくさんものを得ることができました。それ以上の価値を見出せたことも一緒に報告いたします。

全国大会にかかわる中で、一番大きかったのは全国の児童館職員の方々とふれあうことができたことでした。児童館では、遊びの技術やレパトリー、理論、資格取得の研修がありますが、私が何よりも影響が大きかったのは、皆さんの心でした。児童厚生員の魂とでもいうのでしょうか。岩手大会に参加したこと、全国児童厚生員研究協議会に皆さんと出会えたこと、児童健全育成推進財団の方々に出会えたこと、そして県内におられる熱い思いをもった児童厚生員の方々に出会えたこと・・・すべての方々が、児童館に対して、子ども達に対しての熱い魂をもっておられ、大変驚きました。

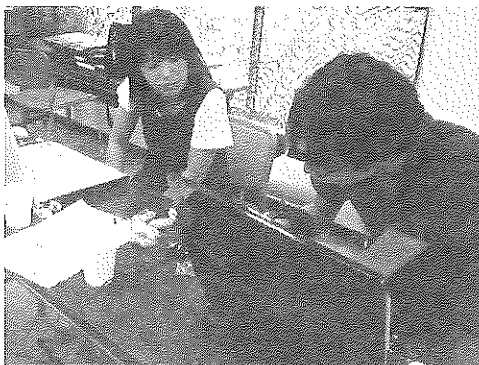
この全国大会のお陰で、私の中の児童館に対する思いが変わってきました。そして、広報の活動を進めていく中で、義務の気持ちだけでなく、楽しんでやっている気持ちが強くなり（企画委員長のマネージメントにまんまとはまってしまったのかもしれませんが）最後には、大会が終わってほしくないと思ってしまうほどになりました。それは、きっと多くの仲間が、苦しかった時に支えてくださっただけでなく、児童厚生員の魂をもった方々は、自然に生きる力を与えることができるからなのかもしれません。

今大会の、記念講演をいただいた石井先生。初めて出会った時に感じたオーラを忘れることができません。児童健全育成推進財団情報誌「じどうかん」にも書かせていただいたのですが、ケアリングクラウンと児童厚生員の本質は同じだということは、テクニックや遊びの種類をいっぱい知っているからすごい厚生員ではなく、魂があってこそ始めてそれらが輝くということ。子ども達の心の貧困を救うには、技術だけ、イベントだけでなく、児童厚生員の魂があり、心が通じ合っただけではないのでしょうか。その魂があるかないかで、児童館のレベルが変わることも、肝に銘じておかないといけないと思いました。

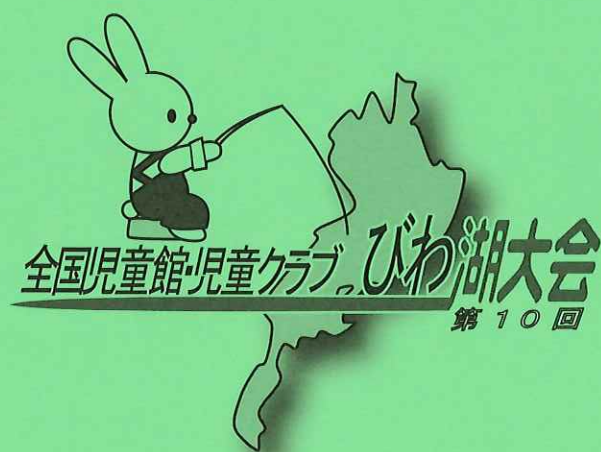
長い児童館の歴史の中で、今、逆風が少しずつ強くなっている滋賀の現状を踏まえましても、児童館が児童厚生員がこれまでにしてきたことを、アピールしていかないと感じています。個人主義が跋扈し、日本人の伝統である和が崩れているこの世の中だからこそ、児童館はもっと輝きを放ち、和の心、思いやる心、年上を敬い、年下を可愛がる、児童館でしてきたことをもう一度振り返り、子ども達に伝えていかなければならないのではないのでしょうか。そして、生きていくために必要なことを遊びの中で学び、生かしてほしいと願っています。日本の歴史を読み解く中で、今まで知らなかった日本の新事実に出会うことがあります。日本神話から始まり現代に至るまで、日本人が培ってきた伝統と心と志は、現代で言われているよりすごいことを諸外国から尊敬されていたことをご存知でしょうか。その伝統を踏まえつつ、子ども達にこれからの時代がどんなに変化しても魂だけは受け継がれていけるようにしていくのが大人の務めだと思います。

最後になりましたが、この大会にかかわったすべての皆様に感謝申し上げます。また、お忙しい中執筆協力していただいた、児童健全育成推進財団理事長鈴木一光様、全国児童厚生員研究協議会会長千葉雅人様、県内スタッフの皆様、ありがとうございました。

(広報部長 寺内章博)







編集・発行	第10回全国児童館・児童クラブびわ湖大会実行委員会
発行日	平成23年2月11日
イラスト	うかいひろこ（児童厚生員）